

オーディオドラマ「カラーテイスト」

深水深月 ふかみ みづき
///シキ

浅倉仁 あやくら しのぶ
浅倉桜 あやくら かなめ

如月七海 あやつきなみ
黒辺真夜 くろべ まや

ヨウ

【1】「海に浮かぶ月を見上げて」

「一」

ドボン、と海に沈む二人

【深月「海を見上げる。——底から、空色に煌めく水面を。きらきらと、舞い降りてくるのは光の粒……淡く、空の中へ泡と共に消えて行く幾乎かの想い】

仁 「深月——」 ひめよね、深月……ひめよね……」 深月に寝かされた仁は、
深月 「ひめよ——……」 抵抗せねば

深月「ひんやりとして、——けれど温かな指先が絡まり、涙が海に溶けていく」

仁「」

深月「んつーー、」キスされて

仁 「——ひ……」はあ……」見つめて、泣かそつ

【深月】「『私は』、すぐそばにある親友の顔を見て、そんな事を、思ひ出していた」

深月「ううふう……—」

仁 「深月……」※徐々に後悔が込み上げてくる

深月「つ……」※こんなにいひて欲しくなかつた

【深月「私たちは、落ちていく。溺れるはずのなら海の底へ。飲み込まれてゆく——。——運が遠くに映る輝きに見つめられて……。……親友の泣顔が、夢の少女に重なった】

深月「オーディオドラマ・カラーテイスト 第一話 海に浮かぶ月を見上げて」

「2」

深月「では、失礼いたします」

扉を閉める深月。波の音

深月「……七〇〇」

深月「久しぶりに帰ってきた町は思ったよりも変わってはいるけど、強いて言つたら昔より潮の香りが濃くなつた……もう少しがくなる。でももつとそれは思ひ出修正つてやつて、結局あまり変わつてないんだろ? なつて氣もしないでね」

深月「懐かしいなあ……」

深月「浦にあらたな街、耳をすかせば聞こえてくるやうだ」。――。今日、私は――、「歸つて來たりた」。

海の音に耳をすます、鮮明な波の音

深月「…………」※ふつと微笑む

【深月「今は言つても、あんまり覚えてなかつたりやするんだけどーー」】※少し和む

海の音、一度目とはまた違つた柔らかい響き

深月「……んーつ……」或ら何ら

仁「何処だつて同じじやなじへ」

深月「わかつてないなあ、仁は」

仁「んやー、深月が変わつたんじやなじかなー」※苦笑まじりに

深月「んへ、ひめいひへ」

仁「何か何処そのお嬢様つて感じだよへ。振抜けかやつてもー、見事に(都合に)来まつたねー」※冗談交じり

深月「ええーつ……? おかしい……へ」※真剣に

仁「ううん? 変な語だけひしひりかれてる。深月っぽくならぬる深月だなーつて」苦笑して

深月「なにそれ」※苦笑

仁「昔、深月イジメた奴らが見たら驚くだろーがー」

深月「そんなんは?」

仁「言葉が出来ないかわね。つてて言つてや、めらつりやうに貰えてないかわ知らんね。なんなら飯つかなじかね? 深月だつて」

深月「んー……」そつがなあ? 私は未だに根に持つてたりするんでむし

仁「うきうきうきつ、あんだけトロリとやり返つてねらつてまだ足りませんかー」

深月「派石にわらわらがじうじね」※笑つて流す

仁「おれでやんない? 女の子に泣かされて見てるんつか可哀想にならへりだつたんだから。鬼の深月だつて」

深月「それはひーもすみまやんねー」

仁「(苦笑)だからこそ、深月がサ・女の子つて感じになつて私は驚いたのでー」

深月「はらはら?」※あしらひ

仁 「神社、じつあるで？ 復興^かわせる氣あるの？」

深月 「んー……そのつむりはわかつたみたい。もう壊れそつだし成すがまも、成^なれるがま^ま仕^しやもん^んで。……お父さんも後所の仕事で忙しかったみたい」

仁 「深月の巫女^{みこ}姿は崇めないのかー？」

深月 「残念でしたー」※笑って

仁 「絶対似合つのにー」

深月 「やめてもかー……’……あれつ……？」※ふと目^めが止まる

仁 「ん？」※足^{あし}が止まる

深月 「あれつて……極？ ほら、あつちの校舎」

仁 「んウー……？ ああ、極、極。んで隣歩いてるのは生徒会長」

深月 「へー……背、伸びたね。びっくりした」

仁 「双子なのになんてこんな差が当るだーねえ……？ 私も驚きたよ……」

深月 「えー？ 仁^{じん}があんなんだったなら私はやだけどなー」

仁 「個人的にはもうちょっと色々成長して欲しきつてうつつか……んかー……」※じにじにじに

深月 「（くすりくすり笑って）生徒会入ってるんだべー」

仁 「うつん？ なんてゆーか……彼女？」

深月 「極にー？」

仁 「まーぶ。もう取つ替^かえ引つ替^かえ。かまーひ^{かま}ひからひて帽子^{ぼうし}乗りますがねのよ^ようえ……そのつか離^{はな}れんじやないかしら」ギャグの方向

深月 「またまたあ」わかつて笑う

仁 「おじる癪^なをれるつて感じたけど。一^{いつ}かで、ついたまへ」

深月 「……？ 行き止まり……つていうか、出口？」

仁 「考えたんだけじや。校舎案内するより先にオススメスポット教えとかなきやかなつて？ ジーセ^{じーせ}これから時間はタシタリあるんだし」※嬉^{うれ}しき

深月 「一理ある」※クスクスク

仁 「でしゅ？ どうひんじで、ごからかまーひ」

※おーひと扉を開ける

深月 「——、わーつ……」

波の音

深月 「すだりー……、なにこれー」※眼前に広がる一面の海

仁 「一、三年前の地殻変動で完全に沈んじやつたからさ、こつち側の校舎裏つて一面海なのよ。」^{一応補強してあつて崩れるなどはなから安心。}一特別棟だから普段は誰もこなじんだけじ……いかがかな？」

深月 「凄いねこれ。崖の上に立つてゐみたい」

仁 「ここを境に向いひの方まですつと続いて……」ほら^{ほら}群衆^{ぐんしゆ}の覚えてる？ ちよこんつて頭だけでてたど奴。あれもすっぽり沈んじやつたんだもん」

深月 「ほんと？」お目々キラキラ

仁 「行つてみる？」

深月 「行こうつ」

仁 「そーくくると感つてたつ」※いいいい

カバンを校舎に放り出して飛び込む一人。ぶくぶくと泡^はが上^あがり、一人の体は沈んでしま。

【深月】「西暦一千何百年。今から数百年前に地球は海に沈んで、それから人類は少しずつ、進化を遂げるもつが形でその世界に適応して行つた……なつら。今はもう廃業した我が神社ではそれを海神様のご加護つて呼んでいてーー」

ぶくぶく泡をあげながら泳ぐ一人。

仁 「（笑みを浮かべる）」

深月 「（微笑み返す）」

【深月】「煙めく水面、差し込む太陽。私たちは、空こそ飛べやしなうけれど、海を泳ぐことはできる——。透き通つた、空色の海の中を……まるで、鳥のよつこい」

深月「凄い景色だね」

仁「じつ? 街の方じやビルを見下ろすなんて出来なかつたでしょ?」

深月「そうだね。あつちの方は結構陸地残つてゐるし、こんな景色……向より水がすぐ綺麗かも……咲葉も……」
あんなに沢山、しなじむ?」

仁「あーつ、あつちの海って潛りたくなじか?」※自慢げ

深月「……ビル群がいいら辺つてことは……やつかして小島や沈んじやつたの?」

仁「うん。正しくは山だつたらしくんだけ?」

深月「くまい……あそこはすつと残つてゐるもんだと聞いてたのに。咲葉ももんですがー……」

仁「——ねえ、深月。私た、やつは嬉しいんだよね。深月がここにいるっていい」

深月「ん……?」

仁「曲がりなりにも深月がここにいて、咲葉がここにいる——。……今か今か話せりといががんだか嬉しい」
※苦笑

深月「なにそれ、なんか照れ臭いんだけ?」※照れ照れ

仁「うん、私わ耻ずかしくてやばらや」苦笑

深月「自業自得ですねー」

仁「えぐく」

深月「(クスクス笑い)」

【深月】「繊やかに、しかし確実に私の知つてゐる景色は変わつていて。記憶の中の景色と、それらは随分と横並わりしていく——だけじ変わらぬらうかのやうにはある」

深月「(思ひぬけ笑う)」※つぶらん? クスクス?

仁「なに?」※自分のことを笑われてゐると思った

深月「なんでもないです?」

【深月】「何だかそのやうか、嬉しいつた」

「3」自室

深月「たたいまーつ……て、……お母さんは挨拶回りか……。……はーつ、疲れたーつ……」

【深月】「不安と好奇心、じつちの方が優つてたなんて一概には言えない。だけじホシじつたのは否めない。また、この街で暮らしたじは思つてた。だけじ、やつぱり心配だつたから」

廊下を歩いて自室へ。カバンを置いてベッドに座る

深月「ふー……」

【深月】「もう一人の、——本物の『リラキ』のやうが」

深月「なんだか肩凝つちやつたよ、リラキ」

リラキ「うん、一日お疲れ様」

深月「はーつ……、部屋の片付けは任せたーら?」

リラキ「任せこーつそ? 代わるよ」

深月「いー」※入れ替わり

リラキ「ダンボール適当に開けるけど、僕が土付けをやつしていくんだよ?」

深月「レアワクトに関してはリラキの方が適任でしょー。……私そーうの苦手だし」

リラキ「だつたねー……。わ、なにそれ、……はにね?」

深月「クジラ猫。可愛くない? 向いの玉ねぎにも見つけて買って来たの」

///シキ「また変な物を……」
深月「だって止めなかつたし」
///シキ「やれやれ……」
深月「仁、覚えてくれててよかつたね」
///シキ「まーね、おれられてるかと思つてたんだけど」
深月「年賀状ぐらい毎年出せばよかつたのに」
///シキ「えミー？」※苦笑意味に流す
深月「はー……。……極、彼女いたねえ」
///シキ「いたねえ……？　昔からカシ門よかつたし、驚きはしなけり」
深月「……羨まし〜」
///シキ「なんで？」
深月「ぐつついーー」※怒。ふくれられる
///シキ「変な深月」※クスクス
深月「ほひー、私はほひ語せて樂しかつたな……。街の友達ともやつは違う感じだつた」
///シキ「やひ歌ひした。今聞きたくない。深月は街に残りだらんじやならかつて」
深月「ぐ？　なんでそつがるの？」
///シキ「樂しそつにしてだじやん。街での生活」
深月「そりやホーだかひ、私は弱はーー、……あー、かわいがれてそれも弱がやーー」
///シキ「え？　ううも、体んで。疲れてるんでしちゃー」
深月「そつじやなくてそれ入つてるの？　着たから……ー」
///シキ「あー、変なひるでちやんの女の子なんだよねえ、深月つて」
深月「氣にするだしちやんつー。ほり、変わつて変わつて。変わつたからちがいの目をつぶつて」
///シキ「ほじはら」
深月「ほあ……」

ダンボール片付け始める

深月「錯感なんだから……」かわいと拗ねてる

■深月「一〇年前、深水深月という『女の子の体』に生まれたもう一人の『女の子としての人格』、それが私だつた。私が生まれてからはずつと『元々いた』//シキは自分の部屋以外では表に出ないがくなくて、……で、これが、出たくないつて言い始めた。だからこそ、この『深水深月』という『少年』は私を生み出したんだと思つてそれを否定するといはでなくて。するするいそのまま、私は『深水深月』を引受けたる、かわいがり、一〇年も」

深月「はあつ……」※でもそれは嫌ではない、世語が焼けるなあ？って感じの溜め息

■深月「私は、引おりやりの//シキを守つてゐる儀物の深月。だけど、それも懸くからと思つてゐる。思つてつまつて、だつて私は」

深月「（苦笑）」※苦笑意味。世語が焼けるのは自分もだ。

■深月「私は、そんな彼が好きだから。……一人の男の子として、うつの體にか、好きになつてしまつてじだから。……だから私は、」

深月「馬鹿だなあ」※一種の充実感

■深月「叶わぬ恋だと知りながらも、彼を守り、傍に居続けたい。——彼が私を必要としてくれるかわりは」

//シキ「仁せ……ひつねんだる」

深月「ぐへ……？　なにが……？」

//シキ「ああ、じめん。独り言」

深月「氣にならじやん」

//シキ「んやー……？　……ほり。極に彼女できたんだから、仁にも彼氏いるのが一ひとか……。……双子なんだつて

「え……なに」
「また上の型？」
「すみません」
「ひじのだけど。……？ どうかしたの？」
「いや……なんか向こうに見かけない生徒いるなーって」
「……？ ああ、にちやんじやなし……？ ？ 隣の子は……誰かしら。……気になるの？」
「別に。なんだか昔の友達に似てたきがしたんで」
「へえ、極くんにも友達いたんだ？」
「友達……ってか……幼馴染……？ ガキのころはよく遊んでましたよ、たこ焼き作るうとして真っ黒になつた
り」
「ふつ、……極くんが？ 想像できないんだけど」※笑いを堪える
「子供の頃の話ですよ。……最後の方はにじはつか遊んでた記憶しかありませんやんけど」
「……？ もしかして女の子？」
「女ですよ。可愛かったからそれでイジメられたりして……ああ、大抵は構って欲しくてからかうから出してたんで
しあつけい」
「へえ」
「なんすか」
「……極くんのそんな顔初めて見たから。……面白になつて」
「はあ……、……昔の話ですよ。昔の。懐かしくなつてただけです」
「あら？ 別に始じたりなんてしないんだから、気にしなくていいのよ。」
「そんなつわりありませんけい」
「自意識過剰だったから」
「はら」
「（クスクス）——それで時間は取つてやらせるのかしら？」
「七海さんがそつしたつてんなら図書室で時間潰してますよ。終わったら来てください」
「つん？」※微笑み
「……」
「……極くん？」
「はい？」
「んつ……」※キス
「つ……、……人に見られますよ？」
「見られて困るのかしら？」
「それもそうですか」※冷めてる
「——また後でね」
「ええ。（七海を見送り、向かい側の校舎に墨線を送つて）……深月……」

黒崎「……もし、深月がこの町に戻ってきてしるのだとしたら、」

「じひさんのかが、……おらひ」

波の音でFO

仁「統」

7

深月

【2】「深淵の御子は廻りゆく星を見るか」

「」

深月 「私の始まりの記憶は今でもしつかりと覚えていて。光も差し込むならうつむいた深い底に沈んだ教室の中で彼は一人泣いていた。その涙の証も、理由も、悲しげと思つ感情さえも。……私には何一つ分からなくて、ただ呆然と自分の内側にいたその子を見つめていて」

深月 「私……私は……——、」

深月 「それが深月という少年の中に生まれた、少女としての人格。——それが私。深水深月という歪な存在の、少女の体をした彼にとっての守り人だった」

「シキ「カラーティスト」 第2話 深淵の御子は巡りゆく星を見るか」

「2」

る。この方法に海藻を用いた壁、床、天井などに用いられる。

深月「おおおう……大体股下、時折腰つて感じかなつ……？ こんな海面高かつたけ……、船引っ張り出した方が楽だつたかなあ……」

深月「ふと笑う」、面白いねー、ハジキ?」

「月深」の「月」は、月の意味ではなく、月の音を表す言葉です。

「深月「ぱたり音//」サキをドン×アラタつてララ子達に由会つた、おひるごはんして娘むすめおひる、お互い成長してるし、仁も頗る私変わつたって言ってたから別に——」

枢「あ」

深月「オツ」

「……深月」ぱつたり出くわす

深月「枢」——.....

枢 「.....」

深月「な……なんでしたか？……？」※わざと身構える。ギャグ方向

「え……」お嬢様の手が止った。

深月「なんですかーそれーー まるで私が女の子じゃなくかつたみたいじゃないですかーー

「昔から可愛がつたとは思つよ。けど、綺麗になつたと思つから」

深月「つ……」そ……それはー……ありがとう……」※努力しているので照れ臭い

「ん、※そちらの貫れてる

深月「て、あんまり驚かないんだね。だから聞いてた?」

枢 「まあな

深月「何して、

「うむ……そつそつとおじやがうんがうん」

深月「んう？」

区「帰つて

深月「まーつね。週明けから同

極 「ひどクラスしかないわ」

深月 「そつか。じやあまた一緒にだつ。……ふーん？」※まじめじ見つめる

「……なに」

深月 「相変わらずだなーって。当たり前だけじそつくり、目元とか」

「ああ。双子だしな。あつちはたいぶ成長期遅れてるみたいだけ」

深月 「確かに背伸びたねーー。いま何センチ？」

「ひやくなんじゅう……80はせかねじゆくつむら」一トヨコメ

深月 「男の子ですねー」※11メートル

「さつやかひなんじゆく色黒」んあー？

深月 「いやあ、極に彼女ができるって聞きまししたねー？」

「ああ……ほんじねしゃべりだまな、あいつ」

深月 「補足するね。一緒にいるひとを目撃したんですよ。綺麗な人じゃん。生徒会長さんかながだつてへ」

「肩書きはね。……そんな寝めるほどの人じゃがらも思つた」

深月 「なにそれ。シババトコヘ」

「別に。本当にいふ言つただけ」

深月 「んー？ まあ、追求はいれさらさらはつからぬけましむへ。あんまり揶揄つて破局するつてのが良識だ」

「てかそつちこそなにしてんの、散歩？」

深月 「そんなど。ひんね風に変わったのか気になつちやつて」

「面白い？」

深月 「私にこつてはね」

「ふーん……」

深月 「……あ、わざわざ極が待つてゐるつてー」

七海 「極くん？」

深月 「わつー」

「……おかえり」

七海 「……？ じむらやまへ」

「ああー……えーへー……幼馴染の深水深月、街から戻つて來た」

七海 「ああ、昨日のーー」

深月 「はい……？」

七海 「じじえ？ じむらやまへ。はつねましー、如月七海です」

深月 「深水深月です……すみません、お邪魔しちやつて」

七海 「じえじえ。随分樂しそうにお話つしてたよつだけい……ひつへ。一緒にお茶でもあらへ」

深月 「うつ、うえじえつ、流石にお邪魔でしがつしそんが度胸ないなー」

七海 「あら残念。極くんつて自分のことあんまり話せなから面白く話でも聞ければと思つたんだけ」

「なにそれ」

深月 「では、また次の機会にでも……」

七海 「残念。樂しこうと思つたのだけ」

深月 「……？ ええ……？ はら……？」※思つてらるまつに思えなかつた

七海 「行きましきつたか、極くん？」

「ああ、……うん……」

船をすいーつ、ゴムボート

深月 「……船……」

七海 「じくひやん乾くじ言つてお洋服が濡れるのはあまり好むじやがう」

深月 「そ、そつですみませんーー。この人にがてー

七海 「極も乗ればつて勧めてるんだだけ」

「七海ねん引いた方が歩めやすら」

七海 「ですつて？」

深月 「なるほど……」

七海 「それじやあね？」

すーつと去つて行く一人

「3」

深月「ねーん」
仁「ありやなうはー?」※しひの間にか真後ろの仁
深月「あら、しおぶ」
仁「御機嫌ちつ? みづか? てうか全然驚いてくれないの」
深月「しひから?」
仁「膝下スカートは濡れやすしかあたりから」
深月「微妙に聞きそびれてる」
仁「仕方なうじやん。極のやつがいたから近づけなかつたんだもん」
深月「あれ? 嘴脣でもしてるの?」
仁「なんだるなー……思春期……?」
深月「どつちが……?」
仁「あつ、いつ、つ、かつー」
深月「そつかなもー。あー、かなめだなーって思つたけど」
仁「深月はそつかを知んなうけど、私にはめつちやくわやがたいたんだからー。あれはオバケだね。触てる感触すらない」
深月「なんじなく仲がつまくしつにならのは伝わつて来ますねえ……?」
仁「昔つから何考えてんのかわかんない奴だつだけじやー、なんかまますます磨きかかつて雲がかつちやつたみたい」
深月「仁は面白うねえ、何言つてるのかたつぱりだ」
仁「えつぶんー、つで、何処行くの? ついてつて良じ?」
深月「良じけど、そつちは?」
仁「ん?」
深月「用事とかあるんじやなう?」
仁「ああつ、連つ連つ。そもそも深月誘つに行つたらわづ家にいなかつたら追いかけてきたんだもー。神社見に行くんでしょ? 昨日気になつてたみたいだし」
深月「なるほど。忍は私のことならお見通しつてわけですねつ?」
仁「あちろんー」
深月「よし、じやあ道案内せ詫つまつたー」
仁「詫されたーー」

「4」

街を散策する一人

仁「とせじつてわざわざ顔のうつりうつも廢村一步手前つて感じたしねー」
深月「まだまだ人いると思つてか?」
仁「いやいや、年々減つてますよー?」
深月「そーだそーだー。こつちの電車つて海底走つてるんだもー。びっくりしちやつた」
仁「ええ……? そつ……? 昔からじやなう? てうつか、アシも廢線寸前だし」
深月「やつは地上走つてるの見慣れちやつた感あるかなー……。やしきは地下が壁にぶつかつててゐるか。ほら、街つて縦に長いし」
仁「わー、やだやだ。この都會帰りがー」
深月「いひかはいひちの魅力があるつて話いやないですか?」
仁「わーつてるわーつてる。第一、私も嫌いじやなう? この街」
深月「それは良かつた。方向性の違うで解散するバンドは多いからね」
仁「そもそも樂器弾けなうじやん」
深月「木琴できるもー」※ぐつ
仁「謎チヨイス……」
深月「仁は歌えるし、ちやうじうじうね」
仁「極はギターで、生徒会長さんにはピアノ? 無理でしょ、途中分解するトメーハンク済かないわ」

仁 「嘘でしょ……？」※深語

深月 「女の子……？」

少女 「んえ……？」

■深月 「縁に覆われた祠に包まれるやうにして眠っていたその子は、」

少女 「ひむ……ひの……？」

■深月 「そして、目を覚ましたのでした」

仁 「続く」

「5」

七海・枢 「次回予告一」

七海 「意中のあの子を連れ出す七か条一」

枢 「はい？」

七海 「其の一、崖に登ります」

枢 「はあ……？ しかも岩がしづかあります？」

七海 「飛び降りたまに海面に向かって正拳銃をもつ？ それで海が割れれば世界は貴方の物つ！ 森羅万象の終焉を目指して演張つてね？」

枢 「なんのこゝや！」

七海 「正直この世の男なんて滅んでしまえま！」

枢 「そつらつらと言つから女帝なんて呼ばれるんです」

七海 「次回一 カラー・タイスト 奥3語一モーザの十戒一」

枢 「七界の霸王つて七海さんについたつたりするんですか？」

七海 「んつ？」笑顔

「6」

七海・枢 「2.5語 七海と枢」

船ですいーつ

七海 「よかつたね？ リリコーズの子達つてすぐに売り切れちゃつから、……残つてると不安だったのよ」

枢 「七海さんの趣味つて変わつてますよね」

七海 「く……？ そつかしり……。リリコーズのつて女のながらみんな買つて思ひへへ クジラ猫。可愛じじやないあなたそつかり」※めじらしさを出して見せて

枢 「みんなが七海さんのつて思ひながら呼んでるか知つてます？ 女帝ですよ、女帝。冷笑の姫君とかつかのクラスの奴は呼んでます」

七海 「大層な二つ名をつけられたわのね。……私つてそんなに怖いから」

枢 「近寄り難い雰囲気はあつたかもしれませんね、如月センパイ」

七海 「その割に物怖じしなかつたわ？ 枢くん」

枢 「ガラスの入れ物ほど、割れやすいものはないじやないですか。そつらつらですよ」

七海 「壊したつて構ねないじでか言つたけね」

枢 「それはそれで面白そつたと思ひますんで」

七海 「ひじり子はやー？」※はやーは濁点。めじらしさを出でます

枢 「他の人の前でやそんなんだつたらかつて人気者になれるもすよ、かつよ」

七海 「人気者になつて欲しづいのかしら？」

枢 「女子に人気出そつですね」

七海 「はぐらかしおやつて」

榎 「だつて、じつせ男は転つて捨てる女帝様には変わらぬじやなじですか。七海さんの男嫌いひじら」

七海 「そんな中、じつして自分はつて思わないのかしら」

榎 「別に。言ひ寄つてくるの断るのメンドクサクなつたが、都合が良かつたんでしゃ」※他人事のものに

七海 「それもあるけい」似てるのよ。あなたつて。可愛いわのーー、クジラ猫」

榎 「はあ」※じつでやじら

七海 「（クスクス笑い）」

榎 「変わつた人ですね、ほんと」

七海 「貴方にだけは言われたくないわね、浅倉榎くん？」

榎 「……」

七海 「好きだけじね、貴方の『そつじひん』」

榎 「俺は苦手ですが、貴方の『そーじひん』」

七海 「あら殘念（※楽しそつ）。だけじ似てらるのは本業じへ」

榎 「そいつに似てて嬉しさは！ ！ ！ も思わないんですけど」

七海 「いえ？ そうではなくてーー、……とても紳士的だもの。貴方つて」

榎 「……たゞは思つてならんですか？」

七海 「だから面白じやない」

榎 「はあ」※意味わかんないが、この人

七海 「歪なわのほじ悪かれるわのよ、人つてね」

榎 「それはなんとなくわかるかも知れません」

七海 「くえ？」

榎 「壊したくなる」

七海 「（くすり）お茶でもしましまつか」

榎 「そつすね」

七海 「（クスクス）」※榎といふのは悪くない。

七海 「続く」

【3】「七靈の陰影」

「1」

草原。吹き抜ける風。眼下に広がる海

深月「NTRは……？ く……？ ……海が……、……狭い——？」

日向「こんな所にいらっしゃったのですか」

深月「—？ 日向ちゃん？」

日向「……例え、何があるんか私はついてまづります——。例え行く末が地獄であるんか」

深月「く……、一体なんの——？」

///シナ「君はNTRに残るんだ」

深月「///シナ……？」

日向「しかしひ……」

///シナ「……」

日向「つ……わかりました……それが……希望みどりいは——。しかし、今一度詰られるのない——、NTRの私めに」

※口付け

///シナ「——……///スナ」

日向「つ……」

深月「ふわつ……—？」 風ね起きる

シナシナ、心臓の音。夜中。時計の音。

深月「ふつ……はつ……は……？ 何……今……夢……？」

■深月「街……？ だけじゃんなない陸地NTRには……？」

少女「んう……」

深月「う……NTRの子……なんで私の部屋に……客間に寝かせてたばすなのに……？」

少女「んぬう……ヒロ殿……？ NTRは——……」

深月「——」 ※呆然

少女「……お休みなさいませ……」 ※バタン

深月「ちよ、ちよつと——」

少女「……スヤスヤ……」

深月「はあ……また寝ちゃったのか……？」

■深月「廻で見つけたその女の子は、あれからずっと眠り続けていた」

///シナ「カラーティスト 第3話、七靈の陰影」

「2」

学校の廊下、歩きながらの一人

仁「それで結局起きたんだ？」

深月「あー、うふ。夜中に1回目覚ましたんだけじゃ——……すう寝ねちゃった。授業とかは出てないから……かうじぱらくうかで画面見ることにはなりそう」

仁「はー、転校初日たつてうつのに心配事が多いけえ」

深月「学校 자체はそっぽい……？ うつのかいじわんがじクラスだし、見てましたか？ 私の泰斗ひまりー先生に見とられて、おバシチコ給えやりましたよーーー！」

仁「はうはう。だからつてVカト入はねたらでしきつ。周りの子、笑ってたよ？」

深月「うはー……それは気付いてなかつた……」恥ずかしさ
仁「この感じだと人気でモードよねえ、深月」
深月「そつかなあ……？ 告白されたんじとかはないんですね？」
仁「気付いてなかつただけじゃない？ 告白されてるのに」
深月「私ってそんな天然悪女見えますか？」
仁「さて、じつでしょねえ？ 昔つから鈍かつたし」
深月「わわわ……そこまで言われるじなんだか自信が」
仁「嘘だよ。そんな鈍感だとは思つてない。けど不思議だねえー、誰かに邪魔されてたんじやないの？ 彼氏作るの」
深月「誰かつて誰にも」
仁「そりやあ、深月のこと好きな誰かにも」
深月「え……」ドキ。足が止まる
仁「え、なに。心当たりあるの？」
深月「なじなじつ、全然なー」
仁「まー、やつらのノリにこなしてあげましょー。ほ、着物しがめらー。ハハハが文部省なりー」
深月「ほーつ……」

「3」

ガララ、と扉を開ける

黒辺「ノックをしたまえ、ノックを」※ケンジウボーズ
深月「へつ……」
仁「あー、気にしなくて良じよ。その人、幽霊部員の黒辺さん」
深月「黒辺……？」
黒辺「ああ、そつた。黒辺真夜といつもいた」※リヤコ
深月「黒辺……真夜さん……？」
黒辺「イエーッスー。黒辺真夜は誰かつてー？ ほ、く、やーー。黒辺真夜ひと黒辺真夜様とは僕のひとがのやアーユーオーケイつ？」
深月「帰国子女さんですか……？」
黒辺「いんや？ 純和製。海外文学を読む脚本翻訳版にしか手を出せない」
深月「本、お好きなんですね。幽霊部員さんなのに」
黒辺「なんならそこの部長もりや部屋にはじるんだせ？」
仁「深月、相手にしなくてこなす」
深月「え、でもーー、」
黒辺「つれないなあ？ そつ思わなじかに、深月くん？」
深月「えつこ……？」
黒辺「深月くんたる？ やつれに「かやん」がそつ呼んだ。君も可愛いね」
深月「そつ……そんがいじめじですかい……」
仁「早く成仏なじかが……」
深月「退部じやなくてーー、あつー。幽霊部員だけにー」
黒辺「いじねえ、頭の回転が早い子は大好きー」
仁「深月に姿が真似したら許せやうわよー」
黒辺「何をどう許せなじのかな？」
仁「……元神に仕える家系の人に被つてからうとか」
深月「いやらや無理ですよー」
仁「だよねえー……？」
黒辺「ひひこなもー、僕つて嫌われてるのかな……？」
深月「好かれてはがたそつです」
仁「ほつとけほつとけー」
深月「あのー……、黒辺さんてなんで男の子の制服着てるんですか？」
仁「深月つ」
深月「だつて気にならし」

黒辺「と言われてわな……裸でいるわけにやさかないだろ？ それともなにかな？ 着物とかのが似合つて言いたいのかな？」

仁「似合つかねえきものー」※クロ一

黒辺「実際似合つんだけどね」

深月「あの……？」

黒辺「ああ、じめんじめん。『わわい』だよ」

仁「おい……」

黒辺「君の意見はわつむかたし僕が君でもそつ聞くだらう。ひとつして男物の制服なんて着てらるんですか？ こてね。安心してくれたまえ、男装癖があるわけじやなら。『これが』僕の正しい姿なだけさ」

深月「あー……愉快な人なんですね？」

仁「随分ぶん抜けたわね」

深月「たつてこの人本当のこゝ話してくれてから感じすよ」

黒辺「ご名答。真相を語るは愚の骨頂。情報の伝達は正しく行われるべしかけどそれが全てつてわけでわから。人生において必要なのは楽しむトト。人が人として正しく生れるトトトトは実に難しうと思つが樂しく生れるトトト一矢においてはその難しうトトトトがわらだらうー」

仁「流石深月ねー、ある意味核心つらてるも。この人かなり良し加減だし、ほんと濁渋がんじしか言わなじから」※黒辺がじちやじちや言つてらる前で。編集で被せます

深月「脹やかな部活でもかつたね」

仁「空氣読めないつて罪だわあー……」

黒辺「読めなじやなくて馴染まなじだけだけ」※ぬらつじ入つてくる

仁「だとしたら性根が腐つてますね。水と油でも潤滑油程度には馴染みますも」

黒辺「残念ながら弾を出しているのは油の方なのさ。清らかな存在である僕を世界は認めなかつた」

仁「お氣の毒をまでーす」

黒辺「ああ、そつた。女装癖はないんだけれど折角だから試してみやうか」

深月「はい……？」

黒辺「ぱちんとね」

深月「わつーー、」

黒辺「どうかな？ 似合つてる？」

深月「くつーー、くつーーーー」

黒辺「なんかトト……防御力を削り取られた気分だね、そりと。もくわまもトトんな破廉恥な格好で歩けるね君たちは。露出癖もあるのかい？」

深月「早着替えですかー？ すばらー」

黒辺「いや、そつではなじんだがーー、そつ難しうトトトトがわらや、……ほらつ」※バチ八

深月「おおー」

仁「なんで文物の着物なの」

黒辺「話の流れだよ。ひとつだり？ 似合つてる？」※色氣を持たせて

深月「お繪圖ですかー。てつうか髪も縋り上げて……じまのー磨で？ー」

黒辺「ひとつひとつも、万物の姿形とつむのは魂に由来するからな。僕のトトの存在になれば見てくれを弄るトトトトうつてことはなじゆわ」

深月「あー……流石先輩ーー」

仁「まだをつくり放りなげたなー……えつじね、深月。肝心なトトで喰み合つてから説明してやくよ黒辺さんには年上だけど先輩じやなじし、なんなら一年生だからトトーはらむ」

深月「一年で留年……？」

黒辺「いじねえ、可哀想な目で見てくれて嬉しう。その氣があるなら感めてくれても良しんだけ」

仁「ちよつと懲つててからて良じ……？」

黒辺「嫌だね、僕が嫌るとしたら世界が終わる時だ。その時まで僕は言葉を吐かぬけむ」

仁「ハイハイ、なら『少しづまひに』自己紹介してみだら？」

黒辺「そつだね。ならば、改めましてトトにはちは、文芸部の初代部長にして創設者の黒辺真夜だ。しもは部長の座を浅倉くんに譲つて幽霊部員をやせて貰つてらる。何か用事があるトトはうつでやねうど？ 僕は大抵この部屋にいるからね」

深月「幽霊部員やんなのに……ですかー」

黒辺「幽霊部員だからさ」※トトトト

深月「……？」

۱۱۱۱۱۱

仁 「ねーひー」
少女 「……? ヒロ殿ーー」
深月 「わつ?ーー」
少女 「.....? あ.....え? ヒロ殿.....ですか.....?」
深月 「や.....えひ?.....??. 誰かと間違えてない.....かな.....??.」
少女 「.....? すみませんーー 人達のものでしたーー」
仁 「えひ?.....? ん?.....?」※なんだかの子。こんな子だつか?
深月 「えつと。私たち、洞で眠つてた貴方を見つけたんだけど.....、わかる.....?」
少女 「そうか、私が寝ていたのは」
深月 「私の家」
少女 「そつたつたのですか.....。我が家に誰かおりませんでしたので勝手に.....もろしかつたでしちつか.....」
深月 「ひひむねかしらひひむねかはがら? 平氣?」
少女 「はら.....体の方はなんとか.....つかし.....えひ.....」
深月 「.....? どうかした?」
少女 「ヒロ様.....ではないのですよね.....?」
仁 「ヒロ様って誰も」※めらつ
少女 「なんと申しますかその.....」
深月 「わらひひー? そんな風に眠んだら可哀想だも」
仁 「腕んではらやーん。ただ警戒してるだけですやーん」※泥棒捕の匂いがある
深月 「はらー.....?」
仁 「私は仁。んで、ひひむねが深月。生憎だけどそのヒロ様って人は分からんだけえ、その人に閉じ込められたの?」
少女 「渡船もありませんーー ヒロ様はひ.....?」
「.....?」
少女 「.....ええ.....私は.....その.....」
仁 「んー.....?」
深月 「ああああ、仁。そつうひひは過去聞いてるわからんして。.....家の場所とか、わかる? 誘拐されてたとかじやないかな?」
少女 「.....すみません.....あの.....実はよくわからなくて.....」

仁 「なに? 記憶喪失だとでもゆー?」
少女 「そう……みたいですね……?」
仁 「みたいですねってあんた……」
少女 「ごめんなさい……」
仁 「んウー……?」※幽しきなめー
深月 「……何か事情があるんだよね、もつと」
仁 「深月じー?」※良からぬノリを帯びてやしませんかー
深月 「まあまあ、困った時はお互い様ってね?」
仁 「それにしたって……、……信用してもらいたい?」
少女 「決して幽しきやのでは……。ただそれではその……、……やのうしきは黙って頂けると嬉しいのです……」
仁 「みのわらへ……、記憶喪失なのに幽しきならとか面白で書いてるんでかわい太~……」
深月 「大丈夫だよー、たってこんな可愛いやんたよーへ。悪い子はわけだらじやんー」
少女 「わつ」
仁 「その判断基準はいつがのた」
深月 「怪しくならむんねー?」
仁 「ん?」
少女 「あの?……。……私が腰でついたてらの場所く、案内して頂くトロリセドシモハルヘ……」
仁 「なあーにー? あくまでも記憶喪失ってわけ?」
深月 「まーまー? ううむ? 遅れてっておけーー? ……ルルルで召前は? それも覚えてたら?」
少女 「私は……、……私のいは、川かみが崖ひくだれらへ……深田やま? は敵?」※深月の出方を伺っている
深月 「川かみやんね? 改めまして、深水深月です。ひのわらじやん~」
少女 「はう?」
仁 「ねーーー」
深月 「ほら」
仁 「浅倉」。……深月に変ないじついたり許せないから」
少女 「あつ……」※迫られて身を引く
深月 「ルルルル。ほら、行く? ルルルルルー」
少女 「……はう?」
仁 「ヌウ?」
少女 「…………」※仁のいじを気にしつつも先をいく深月を見つめる
少女 「ヒロ様ーー」
少女 「続く」

「6」次回予告

黒辺・//シキ「次回予告ー」

黒辺 「可愛いやのには旅をやせる、可愛いやのを食べやせる、ほんは妖怪口コフ子ハハターカー」
//シキ「妖怪口幽靈へじひつ連つんです?」
黒辺 「脚を翻られた脚の反応だねー。合流口コハ脚ひじを震べやかんかゆく口コせれやーいふかね。シカドラハヒをやれてじるじつ実感がなじかねー」
//シキ「無反応なら実質口コフでんひですか」
黒辺 「脚ひじを震べやし脚部がひ価値はがらし業は業でるががー」
//シキ「独特の感性ですね」
黒辺 「そつ言ひひトロ、大事にしてじひつんが」
//シキ「次回、カワードトロスト 第4話ー 黒辺をにかあーへ。……大変だね、黒辺やん」
黒辺 「彼女の脚部はタラバガニー」

「7」

黒辺・三上「次回予告、その後の一人」

三上「黒辺さんは女装趣味なんですか？」

黒辺「いやいや、こんな格好をするもつになつたのは死後だよ。生きていた頃は普通の美男子だつたさ」

三上「？ 見た目も作つてらつちやる……？」

黒辺「いや、見た目はそのまゝ。服はちちこちちこちえてるけどね。基本的に学生服ばかり着ていたかなあ」

三上「ああ……なんだか文学少年って感じですか」

黒辺「本を読んでたらナンパされたりしたり？ 女の子？」

三上「へえ……」

黒辺「男たつてわかつたら『不潔一』つて逃げるもつに去つてつたけど、いま思えは彼女たちは高貴な存在だつたのかもねえ」

三上「よくわかりませんか……」

黒辺「どうだ？ 僕と三上君、一人で秘密の花園」

三上「ご遠慮します」※苦笑

黒辺「だよねえ。僕も男には興味がない。そもそも君は僕をひかれてじるからね。一枚だつたら君であがてわからつたんだけど」

三上「正真正銘恋愛さんなんですね」

黒辺「欲望に忠実だと書いて欲しいな？ 次回、カラーティスト第4話。深淵の呪縛、沈む星！」

三上「女人にしか見えないのが怖ら」

「∞」アナウンス

仁「オーディオドラマ『カラーティスト』はYouTube' Podcastなどの配信の他に私がHuluやNetflixなどに封入した有償版の配信も行なつております。第2話と第3話のものは『2.5話 十海と極』『次回予告、その後の一人』。（通常に1言口メロを追加してください）。詳しく述べ『カラーティスト』公式サイトをご覧ください」

ヨウ「深月さま……」
仁「でたま……優等生深月つ……あーつもうー わかつたー わかりましたーーー じゃねえんといつもあつてあげよハジヤナヒー けじね、ヨウちやんー 貴方が不審な動きを見せたら繩で縛つて海に沈めてあげるがんねーー 常にしとさがわらうーー」
ヨウ「はつ……はつ……へーー」
深月「よしつ」
ヨウ「こ、これで本当に良かったのですが……?ー だつて私はつ……」※わたくし
深月「……良ひんだけ。これで。……話せるもつになつたら話してくれるよ嬢しづか? んで、お家に帰りだくなつたらじつでも帰つて感じから」
ヨウ「つ……ありがハハハシマスつ……」
深月「いえいえ?」※なんとか照れるなあ
仁「で? まだ締けんの」
深月「ぐ?」
仁「手がかり探しー 記憶喪失たつて設定なんじょーー」
深月「ぐー……今は先に帰る?」
仁「この流れで帰れるわけないじやんーー (※わタ-) なんか瀬の流れも怪しつし、深月一人に任せらんねー」
深月「よつ、大親友ー」
仁「チヨーフラシヤだから……」
ヨウ「あら……?」
深月「じつかしたつ?」
ヨウ「いえ……、あからビビなたか……?」
深月「……?」
仁「ああ、多分ーー、」

ごほほ

イルカ「(隠を隠?)」

深月「わつーー?」
仁「ウおー?」
ヨウ「まおーー イルカさんーー」
深月「ちよつ、わつ、きやつ……くすぐつたひ……ーー」
ヨウ「わー……懲かれとりますね……?」
深月「あははつ、ちよつ、ちよつひつーー 見てないで助けてよおつ……ーー」
仁「そーいえば昔からそつだつたわよねー、深月つて……事あるまいにシヤチとかイルカに絡まれて……。……クジラが寄つてきたことわあつたつけ」
深月「くそーー? そんなことあつたつけ……ーー?」
仁「小さじ頃にね。おーつ、四つ四つ……かわいじがー、ねせ」
深月「はーつ……助かつた……」
ヨウ「……一緒に遊ぶたらのでしちつか?」
深月「悪せしからうからうけい……。……隠せない……?」
仁「ぶつ……あははつ、隠せない隠せないー シヤチならじかくイルカは平氣だよーー」
深月「わかつーー だつて本氣で怖かつたのにはーーー」
仁「ハイハイ? とにかく。この子の見覚えのある場所、探しに行くんでしょ? 案内してあげまおーー、ほら、ハツカヒツカヒー」
深月「んうーつ……ーー」

イルカ「(喜んでつらじく・隠を隠)」

ヨウ「……」※イルカに懲かれている深月を見つめて

ごほほ

仁 「——つてねけど、ムーハハハル街——これは流石に知らなきは言わせがむ——？」
ヨウ 「……すううですね……」
深月 「昔は大勢ここにも住んでたらしくだけじね。浸水してからは強度の問題で捨てられちゃつたんだつて」
仁 「私たちが子供の頃には半分ぐらじまで沈んでたもんねー。たまに倒壊してくるから近づくなって言われてたつ
け」
ヨウ 「……少し近づいてみてよろしきでしょつか?」
仁 「大丈夫だと思つけど、気をつけてね?」
ヨウ 「はいっ」
深月 「……なんだか不思議な子だね」
仁 「不思議つていうか隠してるだけっぽじか?……本当に面倒見るつかり?」
深月 「記憶喪失つていうのは嘘かも知んなしけど、あんなもんには隠し込められてたんだもー。……何か事情があるに
決まつてゐる」
仁 「はーつ……、一度決めたら頑固なじこあるからなあ……? 深月は」
深月 「そつかなあ……?」
仁 「そーが。うつやはふにキヘンしての壁に靠は——……」
深月 「……は……?」
仁 「……つつん、なんでもうらへ。……あれー? あのドームはうた? 姿見えがむづかしい」
深月 「ほらもそそ。イルカ達に囲まれてる」
仁 「わ……全盛期の深月越えたんじやない?」
深月 「またまたあ」※苦笑
仁 「なんか深月に似てるかも」※肩の力が抜けた
深月 「私に?」
仁 「雰囲氣つていうか……匂いが? 妹みたいだも、あの子」
深月 「妹か——……」
仁 「……なに?」
深月 「妹つて言えば仁かなつて?」
仁 「だからあつむが弟——」
深月 「あはは」

ひほほ

ヨウ 「へつ……?」
深月 「わつ……—」
ヨウ 「キヤ———?」
深月 「ツ……流れがつ……?—」
ヨウ 「ハハハハハ……」※イルカに捕まつてゐる
仁 「川わちやん——! そのイルカから手を離したらダメモーー」
深月 「つ……」※助けに行つたする
仁 「待つて深月——! 私が行くー」
深月 「でもつ……—」
仁 「陸地での生活長かつだからか、深月泳ぐの下手になつたつぽいし、任せても」
深月 「仁つ……わやつ……?—」※流れがひどく、足が浮きそつになる
仁 「待つてーー」

ひほほー

深月 「しQふーーー」

「4」

仁 「潮の流れが速いの……、川のままだよーー」
ヨウ 「ハハハハハ……」流れそれそり

۱۰۰

仁 「〈……？」

ビルが崩壊

「ビルが——」

“我——，我——。

۱۵۰

波の音。海面に顔を覗かせる一人

深月	「ふはつ」
仁	「はあつ……はあつ……はあつ……」
深月	「間に合つて……つかつた……」
ヨウ	「深月さま……イルカさんたちも……」

ナル力「(轟ぶ鳴き声)」

「…………バカ……なんで深月まできたのナ……？」
「だつてあのままだと一人とも漬されちゃつてだらうし、危ないつて思つたら体が勝手に……」
「だからつて……」

イルカ「(喜ぶ鳴き声・口吻に懐く)」

三ツ 「ありがとねー」

「やう……」
「とにかく、無事でもかつたよ。仁……」
「んうう……助けてくれてありがとう……」
「んつ」※いろいろつ
「偉いですねー? 勇敢でしたぞー?」

イルカ「(喜ぶ聲を声・口吻に盛りしている)」

仁 「それにしてか……その子、一度逃げたのによく戻ってきたわ

深月 「……つん……？ なんか必死だったからあんま覚えてないんだけど氣がついたら呼んでた。おかげで仁のいところまで一直線」

仁 「呼んでたつて……なに、イルカと話せるとか？」
深月 「そうかも」苦笑
仁 「——、深月ひつ……」※抱きつく
深月 「なにつ? へつ……ひつ……じつしたの……?」
仁 「いやあ……なんてゆーか……深月は……深月なんだなあつて……」
深月 「く……?」
仁 「……深月——」
深月 「な……なに……?」
仁 「……深月……」じめんね
深月 「わつ……? —」

じほんね——、じほんねほほ。

深月 「しのひ……へひ——」※キスをされ
仁 「——ひ……」※キス終え

じほんねほほ

■深月 「水中から見上げた海面は、差し込んだ夕日に輝いてて、それはとても綺麗で、眩しくて——、私たちを包み込むかのようにして浮き上かる泡の粒は、その光を細かく反射させていった」

深月 「なんで……、じつして……」※涙目
仁 「じめんね、……深月……本当にじめん——……」※頬を赤く染めながら
深月 「——……」※困惑

■深月 「その日、私は初めて……キスをした」

仁 「じめんね」

■深月 「親友と」

「5」次回予告

ヨウ・七海 「次回予告一」

ヨウ 「海の中を泳ぐのは気持ちが良いですか? もうでイルカになつたものです」
七海 「昔の人は泳げなかつたつて言つんだから、海神様に感謝しなきゃね」
ヨウ 「海面に出た時『波はあつ』てなるのはそれの名残ですか?」
七海 「そつね、でもあれつて仕事の後の一杯に似てるかも」
ヨウ 「仕事の後の一杯」
七海 「気持ち良いの?」
ヨウ 「気持ち良いですか? 次回一 カラーテイスト 第5話——かわひりビターな大人の飲み物——」
七海 「大人のキス、教えてあげましょつか?」

「6」

深月 「4.5話 カラーテイスト」

深月 「……トトロは……?」
七海 「あら? 田が實めたのね」
深月 「七海さん……? な……七海さん……?」

七海「なにかしり」
深月「なんで巫女服……」
七海「似合つてしまつ？」
深月「いえ、そつじやなくて」
七海「貴方が着なじから着て見たの。どうかしり」
深月「私よりにあつてる氣はしますけど……」
七海「でしまつ？ ケビ、貴方もなかなかのやうに？」
深月「は……？ はうー？ なんで、これつ……水着ー？」
七海「良じ体してるじやなら」
深月「いやいやなんだつ」
仁「おーい、みつやー」
深月「仁……ーー、ハレアハーー？」
仁「ちよつ、吹き出せなうでも済う」
深月「な……なんでメイドルーム……」
仁「はあ？ 深月が着せだんじや、じ主様？」
深月「な……なにが何だか……」
七海「似合つてるんだから問題ないじやない」
深月「問題しかねー」
黒辺「おおへつり、みんなあ～」
深月「……」
黒辺「うやうやうやーー、無理しながらーー、オチ担当でしませんねーー」
深月「いえ、いります。見えなくて」
黒辺「見てまーー、見てまーーだまーー？」
深月「結構です」
黒辺「深月クーーーハーーー」
深月「はあ……」

時計の針の音

深月「……んう……」
ヨウ「すー……、すー……」
深月「……たまね、そつたまね……夢たまね……。……、……黒辺れど……、……夢たま。……ありやがいわ」
黒辺「ちよつじオーー？」
深月「続くーー。」

【5】「瀧の微熱」

「1」

仁 「じめんね、深月つ……本当にじめんね……？」

深月 「仁つ……やめて……やめてよ仁つ……」

仁 「大好きだよーー！」

深月 「仁ーー」跳ね起きた、夢オチ

ヨウ 「んう……？ 深月さん……？」

深月 「あ……じめん……」

ヨウ 「じえ……’……スウー……」

深月 「……夢……？」

△深月 「……つづん、夢じやがら……、あははーー、……夢じやがら……」

△深月 「ミサミサと脈打つ鼓動と唇の感触、あの時の感覚は微熱ひかってまだ残っているよつた気がかして、けれど、それよりか、」

深月 「なんで……？ ミハシトモ……//ミサ……。——ミハシして“瀧ちゃんがやられなかつたの”……？」

△深月 「あれつおり表に出でてはいけなかつた『仁の身体の持が主』にイラだれを覗くべ始めてらが」

仁 「カラーティスト 第5話 瀧の微熱」

「2」

深月 「はあ……」

黒辺 「何度もかのため息だね。部屋の空気が君の微熱に侵されそつた」

深月 「ずっと見て、趣味が悪いですね」

黒辺 「幽靈部員とはじえ瀧は文芸部員だからね、部外者の君のが場運んだとは思つたがいいへ」

深月 「ああ……すみません。鍵が開いてたんでつ」

黒辺 「だろうね！ 僕が開けたのさー」

深月 「許可を頂いたよつたかのじやないですか」

黒辺 「可愛いは正義だよ。君を拒む理由など無い」※断言

深月 「それはどーやー……」

黒辺 「トホホホが低いなあ、唇でも奪われたかな？」

深月 「——」びっくり

黒辺 「じめつじつ

深月 「……やられた」諦めた

黒辺 「それでも天才と謳われた物書きだつたんだせ？ 鼻は幼くんだ、特に面白い話題に譲してはね」

深月 「やつぱり趣味が悪い……」

黒辺 「やつぱり三角関係だろ？ 大抵の恋の悩みなんてワンパターンだつていいや」

深月 「……嫌いです。黒辺さん」

黒辺 「僕は好きだよ、深月さん？」

深月 「わー……」

黒辺 「ああつ、張り裂けそつたは想いき……ほえもひよかねから……傳い恋心の……ーー」

深月 「余裕で不愉快です」

黒辺 「そんな表情もご褒美と思えてしもつたから、僕はひとつにお罪深いの……ーー」※涙

深月 「ひとつそこ勝手に……」

「3」

ガララ

ね

深月「えつこ……もしかしてそれはひでむなじかひがわを合ひやれていたりしませんか……？」

七海「そうね」※あつたり

深月「好きでもなじ相手ひがわを合ひやむのなんですか……？」その……キスしたり……それが上のこと……ひが……」

七海「……？ お腹が空けぱとりあえず何か食べたいとは思つでしゃう？ 好物しか口にしたくなじだなんて、ひんでもない偏食家ね」

深月「でも、そんな……」

七海「わかつてゐるわよ。それひんれいは別。宋を詠めれば単純なのかやしけばうかみ、やつぱりそれはひ鑑識に言い表わせるものでもなじ思ひゆう。——誰かを好きで氣持ちはね」

深月「そつじつわのなんですか……？」

七海「そつじつわのモーー？ それに、好き合ひてゐる記じやがくひが氣持が良らかのモーー？ セシクスつて」囁くモーうに

深月「つ……」

七海「じめんはわら？ 深水さんつて可愛らからひからかつかひやつた」※クスクス楽しそう

深月「つ……」※すゞく鑑識している

七海「極くんには秘密？ 彼、ややかか姫じやうからーー、それじやあね」出でらく

深月「……私も……あの人苦手かわ……」※ユナドキ

「4」

黒辺「言つてゐることは間違つてないんだよねえー、モーリツ恒恒體たつてありだよ思つしゃー」

深月「何処いつてたんですか」

黒辺「ん？ 助けて欲しかつた？」

深月「もつ良いです……」

黒辺「そんなに胸に落ちなう？」

深月「だつて……、……やつぱり私には理解できません」

黒辺「好きな相手ひやくでさればそりや一瓣群れだらうよ。けいが、モリツモハ母眼せ回ひかねくねがら。済然じやないか」

深月「けい……」

黒辺「他人(ヒト)の色恋沙汰に口を挟むほひ無難なことはねらう。第一、君お船で宿んでいたんじやなかつたのかい？」

深月「……しのぶ……」

黒辺「お相手は？」おやんか

深月「ちがつ……」

黒辺「ふふふ

深月「……はあ……隣參ですよ。誰にも言わなうでくだせらわ」

黒辺「僕が見えてる相手がじるなひ詠じちやうかも知れなうけど、まも安心してねー」

深月「はらせら。……極はうつ思つてゐるんだか……」

黒辺「美人な彼女で鼻が高じだらうぞ」

深月「黒辺さんには麗ういた私か鷦鷯でした」

黒辺「まお、そひらくやわかつて付ひ合つてゐるんだよ思つよ、彼わね」

深月「……？ なんですか、それ」

黒辺「極くんは大人たつてハナシ」

深月「……？」

黒辺「何処行くんだい？」

深月「七海さんのことです。やつぱり納得でもまやんー」

黒辺「頑固だねえ」

深月「お好きにー」

黒辺「うやせや金く、そちらいそ。お好きにひーぞ？」

がらら、びしゃん。

黒辺「しかしあも……？ ……無難だねえ？」

ぶかぶか船が浮かぶ

七海 「極くん、待たせちゃつてためんなやう」

極 「いえ、別に……特に用事とかなあ」

七海 「行きましょいか」

極 「……じつかしましや？」

七海 「ん……？」

極 「なんかあつたんじやないですか？」

七海 「まあね。でも貴方のそつ言つてころ……嫌い」

極 「それはじーも」※冷めてる

深月 「七海ちゃん」

極 「……深月……？」

深月 「はあつはあつはあつ……て……極？」※極の話をしに来たのに気まずい

極 「なに」

深月 「あー……へりー……おー……へー」

極 「……邪魔なら席外すけい」

深月 「いや、えつど……それはひでやがんじかんだけい……」

七海 「なにかしら？ 気にせず言えはらうか？」

深月 「えつど……あのつ……何かってはひじやがんじでけい……がんて言つた、モヤモヤしてつ……」

七海 「別に貴方には関係のない話でしょい」

深月 「そつですかねつ……あのつ……素敵だと思つんですねー」

七海 「……？」

深月 「私つ……七海ちゃんみたいに大人じやがんじ、極みたく悟つたりしてなじからかからおやんけい……極張つてもす！ 一人のこじー」

七海 「はあ……？」

深月 「街で見かけた時から思つてたんです。だつてなんだかんだ言つたつて2人とも似合ひだし、極つてこんなだけいらやつて時は頼りになるから七海ちゃんかわいそつ言つひにに薙かれてるんじやがんじかなー……なんて、だつてほら、今やいりつして七海ちゃんの帰り待つててくれてるし、ポートたつて用意してーー」

七海 「知つたもつた口をきかないで」

深月 「く……？」

七海 「貴方には関係のないトロイドしきう」

深月 「七海……さん……？」

七海 「レトの……。……行かせつも、極くん」

極 「……ん」

船ゆらゆら

深月 「え、あ、おもつて待つてくだやう七海ちゃん」

極 「深月つー」

船に暴風に乗り込んでバスが崩れる

深月 「あつ」

七海 「えつーー、おもつ……へーー」

うはー、うはー七海

深月 「七海ちゃん」

うはーは

深月「く……え……え……」

深月「浮かんで……来なう——……」

榎「つ……」飛び込む

深月「榎——」

潜つていく榎

深月「なんで……私……」そんなつわり……」※なに、どうなってるの……？

七海「——ふはは……」けほつけほつけほつ」盛大にむせる

深月「榎—— 七海さん——」

榎「大丈夫……？」

七海「じめんなから……ありがと、榎くん」

榎「いらっしゃり、上がつて」

七海「んつ……」力が入らず海に漂りかける

深月「七海さんつ……」

七海「……ありがと」

深月「うえ……」つ……」※引も上げる

船着場に上り海を七海、榎もついてくる

七海「はあつ……はあつ……はあつ……」

榎「……落ち着いた……？」

七海「ええ……」だらぶ海水飲んでしまつだけれど……」

深月「七海さん——、えつひ……じめんなから——」

七海「……じうわ……詰め音つて来たのは貴方の責任だけど、溺れたのは私の問題だもの……」貴方は悪くならわ

深月「でも、なんで……」溺れるなんて……」

七海「海神様に見放されたんじゃなう？」※自嘲気味に

深月「く……？」

榎「原因不明、心の問題じやないかつて言われてるらしいんだけど。……誰にしづんだつて『溺れぬもの』とする人』。聞いたことない？」

深月「そんなの……うそ……」

七海「……」※済済。自分でしもじられない

深月「海で溺れるなんて……想像でさない……」

七海「しなくてじゅわ。……したじりで良じりとなんてなじゅの」

榎「送ります」

七海「ありがと」

アカアカと揺れる船

深月「あのつ……じめんなからつ……」

七海「……じゅわ」

深月「……？」

七海「私が悪いんだじ。……貴方つて——……」……何だか苦手だね？」

深月「え……？」

深月「がにか言ねばおもじかはじめが氣がしかけい」……私はまだ機縛からその様子を昏迷のうじかでわがくで

深月「……驚くほどかわがれえ……！」

■深月「ただ、その場に立ち尽くしていた」

ウ///ネロ' 波の音

■深月「波の音が——……、空を流れて行く雲の影が、白く、煌めく水面を彩つて行く。よく知る、慣れ親しんだ海。心地の良い、優しさでもつて迎え入れてくれたハズのそれが……、……何だか急に良くわからなくなつた」

深月「……なんて、海が変わつたわけじやないのにね」

■深月「そこに映るのは私だ。深月の姿形をした私。……虚像」

深月「はあ……」

■深月「——波音の先で小さくなつた影が——、船を操る枢の胸に、七海さんが寄りすがつたように見えたのは……錯覚だったのかもしけない」

深月「///シサ……」※返事をしてよ……

黒辺「続く」

「6」次回予告

仁・枢「次回予告」

仁 枢「あのね、枢。私、枢に秘密にしてたことがあるの」

「んあ、なに。てか時間ないんだけど」

「貴方は海事に運ばれてやつて来た渕島太郎だよ。だから本番は私の船室かやんばのー。」

「現実から目を背けるのは勝手だけどそれはあんまりじや?」

「川から流れてきた龜にまさか抱いたさびだんぱ」

「ファンキーなねどき話だな」

仁 枢「かぐや姫は私が守つてみせるーー。次回、カラーテイスト 第6話ー、龍宮城で下克上ー。これからが私の時代のよーーー。」

「うちの妹は何処に向かつてんだ……?」

「7」

七海・枢「5.5話 波の音が消える時」

波の音

七海「つ……、……じめんなさい、……らしくなかつたわね」※体を引きはかして

枢「別に。いつかのソビじやん」

七海「いつも貴方に頼つてるつて? 笑わせないで頂戴」※余裕ぶるが足りない

枢「誰もそんなこと言つてないけど」

七海「……子供の頃は普通に泳げたの? クラスでも一番早かつた」

枢「……」

七海「イルカより早く泳げる子だつて評判だつたんだから……」

枢「……知つてますよ。水泳の大会で一回だけ見たことがありますから、七海さんの泳じぐるみ」

七海「……嘘?」

枢「まだ髪が短かつた頃ですね。……スタートが遅れて、慌てて飛び込んだのくんくん追いついてたの知つてます」

七海「……枢くん……」

枢「……同じコースに出てたんですよ。……多分本人がてると思ひますけど。嫌ないひすいがれるから」

七海 「ああ……なるほどね。……私はおまけか」

極 「……ひひひ 似合ひますね、七海さんて」

七海 「おまけか?」

極 「そういう恰好」

七海 「……ひひらうひ意味なのかしらね」 ※苦笑

極 「びしづ濡れやで、……すぐ濡れかやうしそうなひひる、俺、好きですか?」

七海 「……貴方ってほんと……」

極 「……?」

七海 「……じうね? 知つてたもの、そひらうひ」

極 「ふーん……」

七海 「……ひのまほ独りにはなりたくないのだけひ、さて、貴方は私を何処く運んでくれるのかしらへ」

極 「駄前のテムハホシム、……珊瑚がひまじですかひ、モトドシですか?。……体、冷えてるひしちゃう。店長に言えばタオル貸してくれるんで」

七海 「なるほど、良し提案ね」

極 「他の場所が良かつたですか?」

七海 「……うつん、今日は——なんとか甘じものが食べたらからそれが正解ね」

極 「ん」 ※はい

七海 「……ほんと……ひしづらね……」

七海 「続く」

「8」

七海 「〇〇巡××です。オーナートトオシトトア『カラーティスト』はYouTube' Podcastなどの配信の他にYouTube' チャンネルをナリコオガヒを封入した有償版の配信を行なつてほりまちー第4話、第5話のねまけは『夕暮のロストハイム』『5.5話 波の音が消える時』。 (廻音に「音」をメルト追加してんだやう)。 講じくせスタジオ『カラーティスト』がカバーせしと聞こださう」

〔6〕 「黒き漣が寡黙であれば」 ※やせなみ

「」

深月「———」※息を飲む

「私たちにとって海は……、優しい存在だった。そりやあ時々驚かされる事はあるし、この前の「みだりに海流に連れ去られそうになる事」だつてあるけど……基本的にはそこにある当たり前で、穏やかな波の中に身を委ねればあまりの心地よさに眠気さえ襲つて来て……身体と共に意識も沈んで行く。……そんなゆりかごみだりなものだと思つた。なのに……」

深月「ねえ、三ッサ一……？ 部屋隣つて来ただから代わりがたうめ、なんかかうつ……疲れたもんつ……。三ッサちやんちやんかけてるみたいだしち一……。かしづーづ、三ッササ——ん？ 深月サ——ン……」

深月 「……出てこなう……つか……？」

深月「ハジカガヒモトヤリ体質なのは仕方ない。その様に利かいるもんなんだ、だから……」

深月 「……ううんですか? 別に……」

「深月「わかっている。それが私の役割なのだと、知っている。私はリラキの保護者で、リラキが私を助けようとして来れたことは一度もない。……街で男の人にナップされた時だつて、……転校初日で緊張していたつて、……リラキは表に出てこない。なのに『』が流れそつになつた時」

深月・ミツキ「仁！」

深月「躊躇することなく入れ替わったのは……仁が親友だから……？ それとも……？」

深月 「.....」

「深月、「いか唇を重ねて、このほんの画眉が、あそこにはいたのは私では、やハハハハだつた。だけど、それって、——、あり——……」※強調的に唇を離す

深月 「考へるほどが多くて困つかやうが……」

【深月】「聞けない。思ってはいても聞けないし関係ない。私はハシキを守れねば良い、その為に私はいるんだ……だが、私は……」

深月 「……」

深月「……ちやせて『くれなかつた』。……自分は激しく引ひきで、そのくせ体だけは隠して」

深月 「……はあ……」

深月 「するいかな……流石に」

深月「罪悪感だけが、膨らんでいく」

七海「カラーテイスト 第6話 黒き運が寡黙であれば」

「ハハハ」と怒を叩く。ゴボボ

リリサ「ん……？」

仁「あー……」

リリサ「……！」……？」

じほん、と飛び込むリリサ。アリスアリス

深月「えつと……」

仁「その……」

深月「仁の方から会いにきてくれるとは思わなかつた」

仁「学校でもろくに話せなかつたから……なんてゆーか、仁の性格クセはやだがあつて……思ひもして……。」

……田中ちゃんはい」

深月「出かけてる。帰つたら家にいなかつた」

仁「そつかそつか？」

深月「……仁」

仁「なに……？」

深月「なかつたことにしてらうも」※リリサに対してやけにに対しても罪悪感

仁「べつ……？」

深月「なかつたことにしてあがれひ……」……流れそつにかけて隠してたんだよね、仁。だからあんね……」

仁「深月……」

深月「……それむか……止せね」……そつそつ隠して……なりたうん……ですか……？」※自分のことじやがいとわかつていてむかう

仁「……」※ほかーん

深月「なつ、何か言ひなさい」

仁「あはははは、なにそれ、超可愛らんすけど深月やんつー」※爆笑

深月「はああー？」※すばらじ恥ずかしさ

仁「あー、参つた参つたつ。私が男だつたらアシドやっぱかつたと思つわ、それ（爆笑）。可愛すがるでしょ、深月」

深月「人が真剣に話してんのにそれってひどいー」

仁「待つた待つたー。（笑）テロリは軽井してよー」

深月「もーつ……」

仁「昔さ、私が流されそつになつた時の事實えてる？」

深月「んう……？」

仁「深月と私ど、……極も一緒に遊んでて、この前みたいに海流に流されそつになつたの。小学校入つた直後だけかな？あの時も深月、私のこと必死に捕まえてくれて、……極と2人で引っ張り戻してくれたんだも」

深月「……私が生まれる前……かな……」

仁「この前の深月……あのときの深月みたいでカシコもかつたんだも。……街から帰つてきて、別人みたいに女子らしくなつちゃつたけど、根っこの中は變ねつてならんたつて嬉しいなつて、暴走しちやつたつていうか。……私は、深月のそらうひひるる、好きだなーって？」

深月「仁……」※畳然と見つめる、じう受け取つてじうのがわからなくて

深月「……そつか……」仁はその隠からリリサのことがーー」

仁「私が好きなのは男前の深月。そしてあんだけひからいめんから隠から深月ー。気の運がーー。許してやれ給えー」

深月「初めてだつたんですねー？」※苦笑

仁「私たつて初めてよ。お互い様でしょ」

深月「そつひうひうにしてあがましやーか？」

仁 「だからね？ これからも友達でいてくれない？ 私はあなたの親友でいてあげるから」
深月 「それでいいんだよね？ 仁は」
仁 「こんな可愛い親友でて私は幸せ者だぜ」
深月 「わかった、じゃあ私も仁の親友でいる」
仁 「うんっ。——約束だよ」
深月 「約束」※指切り
仁 「えへへ、何か照れ真じね」
深月 「だね」※罪悪感

「4」

極 「……深月」
深月 「……？ 極——」
仁 「はあ？ 何しに来たのあなた」
極 「お前にじやなじよ、深月に話しあつてました」
深月 「私に……？」
極 「……お前先に帰つてろ」
仁 「はあつー？ なにそ」
深月 「仁」※遙る
仁 「深月……」
深月 「……上ではなそ？ 船で来たんでしょ？」
極 「ああ」※先に海面に上かる
仁 「……深月……」※じついつ事？
深月 「ごめんね、やつ脳うし、また明日学校で」
仁 「んう……」シ……極えーつー」
極 「？」
仁 「深月に変なことしたら承知しないから——」
極 「……ふん」※するわけないじやん
仁 「いや——。なにあの態度——」
深月 「ごめんね」
仁 「……ふうかん……。……つ……なんでもかうー。お休みー 深月ー」※去る
深月 「お休み、仁ー」※去つて行く仁に対して

「ほほほ。わはーんじ波。そこを泳いでくる深月。

極 「…………」
深月 「お待たせつ。ごめんね」
極 「いや、うう」

ささなみ

深月 「わーつ……綺麗な満月！」
極 「街でも見えるじやないのか？」
深月 「月はね。けど、こんな星は多くないし、空が広くなじから」
極 「そういうもんなんだ」※じつむながらほーとつしてゐる

「ばしゃん、と船に上かる

深月 「そつ言ひは仁つて船使わぬじよ。機械音痴がの治つてはうの？」
極 「なおつてなし。この距離泳いでるのつてじつかしてるのは思ひかん」
深月 「人のつこと言えぬじかよ……(苦笑)。それで詰つて？」
極 「七海さんのこと。深月のつむだから気にしてるかなつて」
深月 「ああ、うん。けど極が一緒なら安心？ みたじが……。立派になつたねえ？」

枢 「そんなんじやがうよ。……だからああ見えてあの人弱いから、余計な詮縛してあげて欲しくはがうがて。……それだけ」

深月 「……なんだ、やつはかうじやん」

枢 「……なにが?」

深月 「別に?」

枢 「変な深月」

深月 「そつかなあ……?」

枢 「そつだよ」

深月 「……じやあさ、余計がことしないためにも七瀬ちゃんのいじ、少しだけ匂らでからう?」

枢 「なに?」

深月 「好き……なんだよね? あの人のこと」

枢 「……別にそつうじやがうよ。あの人いは」

深月 「……七瀬ちゃんね……? 私は枢くんはそつう関係じやないって。……好き合ってる詮じやがくて、けいわを合つてはいて……だからえつし……」

枢 「セフしつて言われたらそつかわ」

深月 「なつ……」その単語が恥ずかしい

枢 「顔真っ赤だよ」

深月 「だ、だつて……ーー」

枢 「まー……七瀬ちゃんのじつ通り付き合ってはいるんだが。けい、好きが嫌じとか、そつうじやがくて……居心地いから……かな、俺たちの場合は……」

深月 「それって好きってことは違うの……?」

枢 「うん。つか、好きな奴は別にいる」

深月 「え……?」

枢 「……ただ、あんまりにも錯感で……気がつかないみたいだし、……好きせたかったのかわな」

深月 「……そつか」

枢 「……うん」

深月 「……その気持ちは……なんかわかるかわ……知んなう……」

枢 「…………」

□ 深月 「七瀬ちゃんのじつ、振持ちと身体は別だとか、枢みたいに居心地がいからとか、そつうのは全然ビトヒナがいけど」

深月 「好きせたいってのは、……わかるよ」

枢 「……深月……?」※微かに深月の感情が揺れたのを感じる

□ 深月 「モヤモヤビ、今がらがんじやく衝動的に「がそつしてしまつたのむ仕方ない叶つて何処かで思つていて。だからこそ、私もそんなりしてしまつたのかもしかなくて、ーーでも結局これは免罪符にもならぬ言ひ証で」

深月 「……ひめんね、枢」

枢 「んつーー?」

深月 「つ……」※必死に思考停止

□ 深月 「私は映画やドラマのキスバー入場券ひきくじで画報でわくじだ。だつてそれは大人のするいじで、愛を確かめるもつた密な光景で、」

深月 「つ……」※震えてる

枢 「深月……?」

深月 「かなめえ……」涙目になりつつ、かつ一度

枢 「……」

□ 深月 「私には、ひとつやつたつて叶わない夢だと知つていたから」

枢 「……深月」

深月「かなめ……」

■深月「躊躇ちうしゅーー」胸の奥底から纏められたるもつたな罪懲罰ひいがは」沈んでしゅ」

■深月「何処かで、この妖精おはまへん」山のそなへは山口内で……ハトホ、ハトホがおのながは」思つた」

■深月「月明かりが照らす、真っ暗な海の上で、……私は、何度も極ほ、……キスをしたーー」

「5」

ガララッと部屋に戻つてくる深月

ヨウ「おかえりなやうか」

深月「用わむやん……帰つてたんだ？」

ヨウ「はい……少し祠の周りを……、あの神社の付近を見て回つてやりました……」

深月「何か思い出した？」

ヨウ「色々と懐かしいものが……」

深月「……？ それは？」

ヨウ「見覚えははいわらがやが？」

深月「くし……？」

ヨウ「……失くしたと思つてやりましたが、案外探せば存在感つかるやうですね」

深月「……綺麗だね」

ヨウ「はい」

深月「……用わむやん？」

ヨウ「深月やまーー」

深月「わつ」

ヨウ「……運う……」

深月「どうかしたの……？」

ヨウ「……あのひが……山口敵をお助けになつたのは本当に深月やまでもありましたか？……？」

深月「く……？」

ヨウ「かしあひが暗じました……しかし山の音色は……遺い……」

深月「……えへん……なにがなんだか……」

ヨウ「ひ……」山口敵ではないのですね」※部屋を出て行く

深月「あ、ちちひ……用わむやんー」

呆然と立ち尽くす深月

深月「なにがなんだか……。……ねえ？ 〃〃サ……？」

〃〃サ「…………」

深月「……答えてくれない？……か……。……自分の部屋がのほ。……するじゅく 〃〃サ……」

ベシyuに倒れこむ

深月「ひひ……、ひひ……んう……」※ベシyuに倒れこむ。膣唇を押し殺す。

■深月「極ひキスをしたーー。……そのひが、今にがつて胸の内をベシyuもつたつた」

深月「ひひねう……」

■深月「〃〃サの声が、……聞きたかつた」

〃〃サ「続く」

「6」次回予告

黒辺・七海「次回予告一」

黒辺「てやんでえてやんでえー！ 不純異性交遊取り締まり係だてやんでえー！」

七海「家庭内暴力に悩えつつも援助交際に手を出しては座ちていく少女と、其れに寄り添う孤独な少年犯罪者の物語。うふふ」

黒辺「のはあーー？ なんでそれをー？ 人の黒歴史を暴くには良くなじむー？」

七海「少年派ながらにヒロインを絶め殺して『君のことが好きだった』と呟くするハーンは派なしじには語れません。特に妹の」

黒辺「やめてーー。そこから先は自分でやうつかしてたと想つかーー。」

七海「大七星会新人賞受賞作・黒辺真夜作“七つの恋心”」

黒辺「今読み返してわからぬ女作だ……」

七海「次回、カラーイヤスト 第7話ー 口コロ作家には法の鉄柵を」

黒辺「けどまあ売れれば正義にて……気休めにやがりなじねえ……ー」

「7」

黒辺・ヨウ「番外編・クジラ猫の冒険ー」

黒辺「いおねいじるにクジラのよつね猫の形をしたクジラがねのまつだ」

ヨウ「に、や、に、やー……」

黒辺「クジラ猫と呼ばれるそのクジラのよつね猫のよつねクジラはかつて別れた大イルカを探して旅をしてしまお」

ヨウ「そのイルカさんは大ではなくイルカさんなのでしちうか……？」

黒辺「谷を越え、山を辟き、海を飲み干し、大地を枯らして、それでも大イルカに出会えなかクジラ猫は泣き出します。……泣き出しますー」

ヨウ「に、や、に、やつ、に、やつーー」

黒辺「終りには泣き疲れて睡てしまおまつ。——そつして出来たのがこの海、この世界、そつしてクジラ猫は海神様として讀えられ続けたのですー」

ヨウ「……なんのでしちう、これは。そもそも大イルカさんは泣き会えなかつたのですか？」

黒辺「大イルカはクジラ猫の心の中に身を潜めていたんだよ。かつての争いを悔り、口を向き合つた時、彼らは再会できるんだね。どうだろ。児童文学としてはなかなかの傑作だと思わないかな？」

ヨウ「思ひません」

黒辺「即答か」

ヨウ「大イルカの出番を増やしていくやう。そつてクジラ猫さんをやへじ回数ひとつー。なんだか悔じですー」

黒辺「これでも女の子の圖で大人気のアスコラムキキャラクターなんだよー。おじいさんたの抱き心地は最高やー」

ヨウ「その作者が黒辺さんだつたことは知りませんでした」

黒辺「ペンネームはエム・エー・ロイ・ヒー。アヤだからね。子供向け用の別名記や」

ヨウ「聞いておりません」

黒辺「君も出してあけむつか？ 金瓶っぽじ」

ヨウ「必要ありませんー」

黒辺「ま、僕はまつ死んでるから出来ないんだけど。はつはつはー」

ヨウ「……まつち隣りたい……」

黒辺「まお、クジラ猫は可愛らかうや？ 今度抱いてあけてよ。——深月君も持つてるんだろ？ クジラ猫？」

ヨウ「誠に遺憾ながら。抱いて寝ていた自分を呪つておりまつ」

黒辺「大イルカもまつしやー」

ヨウ「結構ですーー。……でもまあ……抱き心地ならうの子の方が……」

黒辺「ん？」※楽しそう

ヨウ「なんでもありませんー」

黒辺「自分に素直になれぬじのつて、辛いねえ？」

ヨウ「続くー」

【7】「子守唄には御伽噺を」

「一」

仁 「カラー・ティスト」 第7話 子守唄には御伽噺を

予鈴

仁 「おはよ、深月」

深月 「おはよ、仁？」

仁 「だんだん暑くなつて来たよなー。かわいく夏かなあ」

深月 「まだもう少し先だと思つけど？」

仁 「台風近づいておてるつて詰だし、さむさむつて感じはするけどねー」

深月 「あー、夏の風物詩ですねあ」

仁 「ですねあー」

七海 「それじゃあまた後で」

極 「ええ」

深月 「……つ……」 ※立ち止かる

仁 「深月つ……？」

極 「……？ めあ、おはよ深月」

深月 「おはよ」

極 「……なに？」

深月 「……つなん？ なんでもない」

極 「はあ……？」

深月 「じめんね」 ※昨日のいふ

極 「ああ……つん……？」 ※もくねかつてなら

仁 「ちよつとかよひー、深月ーー、なんなのよ今の一」 ※駆け寄つて、声は潜めて

深月 「別に？ なんでもないよー」

仁 「なんでもつて感つじやなかつたやしまーー、めらつに何かされたー？」

深月 「違うつてばー、極はそんな人じやないつて知つてるやけに」

仁 「けいは……んう……？」 ※深月がじつわじ運つ氣がある

深月 「ほらほら、チャイムがりますよーー、ねぐらをねーねぐらをねー」

仁 「みづねらへつ……ー」

チャイム

「3」

放課後

七海 「それで？ 深月さんはキスつただけ？」

極 「うん、まおね。深月泣いてたし。流石にそこまで鬼じやなうも」

七海 「そーかしり。私との時は結構穢的だつたと思つただけ？」

極 「七海さんは好むじやん、膚められると」

七海 「人を変態みたうに言わぬでからえるかしり」

極 「ごめんごめん」

七海 「……何だか不思議が子ね、深月さんつて」

極 「そつかな。分かりやすうと思つけど」

七海 「もつと優等生なのかと思つてた」

極 「あれば自暴自棄つて言つんだけ。それに、それ言つたら七海わたくしがかわい」

七海 「幻滅した？」

枢 「ううやあ、嫌うじやなうも、七海さんのそーじつと」
 七海 「ありがと。……私は嫌いだけじね。他の女にはびくよつたオトロ」
 枢 「冗談きつうも。心にも無い癖に」
 七海 「(ため息うつむ) ……誤魔化して目をそらして、気づかぬふりして——……バカみたいね」
 枢 「ふーん……」
 七海 「……ねえ、枢くんてね、」
 枢 「七海さん」※人差し指で唇を抑えるもつた感じ
 七海 「つ……？」
 枢 「それ以上噛み込むのは、……違うでしょ」※穢やかに。距離感を保つ
 七海 「……まだなにも言つてないわ」※若干むすつと
 枢 「言つてからじや遅いかなつて」
 七海 「……そつね。——私たちはそんなこと『必要ない』——」※キスする
 枢 「んつーーー」※応える

M 七海 「抜く」思春を錦らせる程に濃厚なキス——。……けれど、それでもまだ私は冷静で」

七海 「足りないわ」
 枢 「わかってるよ」
 七海 「んつーーー」※再びキスをされて

七海 「足りなかつた。頭の芯まで痺れやすはがはーーー」

七海 「つーーー」※抱きしめ返す
 枢 「七海さん……？」※じつはより積極的だから驚いた
 七海 「少し緊つていて……」※今度は自分から
 枢 「んつ……」※受け入れる
 七海 「つ……」

七海 「——あの夢が——、……私を見ていろ……」

M 七海 「初恋を、忘れられる人は早々いなじだるう。それはやっぱり大切な想い出で、特別な存在だ。恋なんて人間が子孫を残すために貯せる財産でしかない。つまらぬヒトの、鑑賞、くだらぬ理由つけの一つでしかなく。だからこそ、恋は忘れるじがでせるし、冷める。目が、覚める。心も。けれど種はうじやなうじやのがある。失つてしまえば削り取られ、——修復など到底できなうもつた。……他者を自己の一部と認識してしまひうひな」

M 七海 「自身の一部が欠けてしまつたと思つもつた」

M 七海 「つまりはそれを愛い——……」

M 七海 「失笑する他、ないのだけど」

枢 「七海さんや、……いや、気のせいかな」※ピローメーク
 七海 「……なに？」
 枢 「……深肩のこじ、嫌つてない？」
 七海 「……優等生だからかしらね」
 枢 「またそれですか」
 七海 「ああいつ子見てるヒトライドするわ」
 枢 「ふーん……」
 七海 「悪い子ではなうのはわかるだけじね」※それでも好きにはなれそつにはなう
 枢 「大丈夫ですよ」
 七海 「なにがからら」※おもひこむかしていろ
 枢 「七海さん、十分可愛らです」
 七海 「……可愛くはなうじと思うけど」

榎 「しじめがうがありまちゅ~」
七海 「……ほんと、趣味が悪いわね、貴方って」
榎 「（くすりと笑つて） そうですか？」
七海 「そんな榎くん捕まえる私わ、……ひつかつてるのか知れなじか~」
榎 「……独り言、じらつか」
七海 「言ひわね? 言つてみなさい?」
榎 「七海さんこそ、優等生ですもね」
七海 「……それって一途に恋つてゐていいのかしら」※裏面に見当はされ
榎 「うそ、そつじやなくて」
七海 「……?」
榎 「……俺には眞似でもそつわありません」
七海 「……（くちりと笑つて） それ、あなたは木戸ですか。」（※榎のほつぱだりな口） 懐ふ懐ふ懐やんじの
ね?」
榎 「そつやつてすべ子供扱いする」
七海 「子供じやがくつて?」
榎 「くえ?」※挑発に乗る、むつむつむハシ
七海 「わつ」※囁き被せられて

「4」

部室、窓から参事を見つめる黒辺

黒辺 「うやせや、誰かに見られたらいつてもつかりがながな」
仁 「……? なに見てるの?」
黒辺 「うすれおれたくなれるよつた黒歴史」
仁 「はあ……?」
黒辺 「なんでもない」

カーテンを閉める

黒辺 「それにしても、あの子は一縫じやないんだね」
仁 「職員室。せんせーの手伝い……教材の片付けだとなんとか……」
黒辺 「絵に描いたよつた優等生じやないか」
仁 「まーね」
黒辺 「機嫌悪いなあ、経験豊富な先輩に相談してみるかい?」
仁 「そんな嬉しそうな顔で言われたらその氣も失せるわ+6」
黒辺 「事実面白そつたもの」
仁 「ふんーー」※そこにはあつた本を投げる
黒辺 「おつじ? 暴力は良くないがー」
仁 「こんつゆの……」

ガララ

黒辺 「おや?」
ヨウ 「……ソノサ……文書館じやるしきのでしきつか……?」
仁 「ソノヤキタクー、ひしたの、ソノヤキタクー」
ヨウ 「深月さまの母上殿に古い本を探すならソノモロにに行けば或らし回らまして……図書館はいつの昔に潰れたとかなん
とかで……」
仁 「あー……地盤沈下ですね。今は校舎裏にあんぐる」
ヨウ 「そうでしたか」
仁 「確かに貴重な本とかはソノモロに移してあるけど、何か調べ物?」
ヨウ 「郷土史をー、……この辺の歴史などを記したものがあれば詳見したりのですが……」
仁 「物好きなのね」

ヨウ 「あみやくべ……ひつてわ確認しておきたらいいからねのう」

仁 「良じや、黙つておける。たまに文部省へはるがんかはんや眞理のやうだ」

黒沢 「果たしてそれは文部省の活動と言えるのかう」

仁 「この子が體ぐたことをシホールにて張り出つたがゆーそれが船運動になるやう」

ヨウ 「えへん……？」

仁 「ああ、この子の話。気はしなりで」

ヨウ 「はあ……？」

仁 「確か歴史關係のはじめの辺は——」※ガガガ

ヨウ 「……山巣せ……深月わがい取らねたがゆうでよし……？」

仁 「まーね。子供の頃からうつし。深月が小2の時に山の越しかけたからそこからしづかのへ会つてがかつたけん」

ヨウ 「そつですか……？」

仁 「それがうつかけたか？」

ヨウ 「……その頃からお隠れへつづくへしゃつたんですか？」

仁 「はつ……はあ……？」

ヨウ 「その……私わ……あの隠れに移り移したので……」

仁 「へ……お……えへん……山の越しかけたがゆう……」

ヨウ 「……？」

仁 「深月は親友だし、友達だし。……第一女の子同士でつてやがつらじやがう」

ヨウ 「そつでしもつか？ 懇らぐが眞世だつたがゆく、而は山の越しかけたがゆうにも結構移つまうか？」

仁 「あなた……」

ヨウ 「なつはつ、その懇らぐは眞社なむのです。恥じるといひはなじみだつむ」

仁 「葵が子だとは思つてたがゆかそつち方面になつて飛んでたがゆくとえ……」まじ、あつたわよ。深月の娘土安

ヨウ 「ありがうつむわらまわ……」

仁 「なはよ。まだ何か言つたらわけ？」

ヨウ 「深月様は……なんもねひしゃつたのでしゃつ」

仁 「ぐ……？」

ヨウ 「山巣のお隠れをね受け止めに來つたのですかー？」

仁 「うきらきらや、怖じてはけん……おたかあんが……そつちのけがあるんじやなうでしもつか……？」※警戒

ヨウ 「運じまわー、私はただつ……」

仁 「ただ……？」

ヨウ 「つ……、わからまやん……」

仁 「はあ……？」

ヨウ 「深月様がそつでおもひ思つたのですが……深月わがは深月わまで……山の越しかけたがゆう」

仁 「なに言つてんのあんた」

ヨウ 「深月様に双子の兄上が新規がねりたるうつじつんさせ……」

仁 「なじわね。残念ながら双子なのはわち」

ヨウ 「そつですもなえ……、はあ……」

仁 「よくわからんがうわもだべ……あんたも」

ヨウ 「そつですもなえ……」

仁 「……かー……」※山の顔を手で挟み込む

ヨウ 「ふはは……」

仁 「隠つ隠つてこのはねんだの勝手ー、けじや、言えわしがうつんやオトコの見せびらかして悩まうらうかわつ？ー、氣にならぬつやがうー」

ヨウ 「ふみやくべ……」

仁 「細談なら、乗るね。……深月にはせ船づつひうつんじんじん。かへ」

ヨウ 「はう……」

仁 「船の運営であけるからやうに座つて。みのゆかの木船みだらやでしも。其のせれども運営がだのつだの因みし、うつじうつじうわがわう」

ヨウ 「あみやくべ……」

仁 「良じやの良じや。深月が来るまでは細井してあけるね」

ヨウ 「（へあつむ狭つて）」

仁 「なはよ」

ヨウ 「うえ？ 山のんて良いんだね？」

仁 「そつ思つがりやつ少し懐もがやう。そつ警戒心丸出しにわれかやうちたて肩がいゆわ」
ヨウ 「はい？」
仁 「はーっ……それにしてもまだ口も暮れてないのにカーテン開めっぱなしで気が滅入るわね。幽靈って口差しに弱いとかあんのかしら」
黒辺 「本が口差しに弱いとか知らないのかね？」
仁 「でも換気はひつよーじょーへ。そもそも本以前に私が腐つちやう」

カーテン開ける、窓の鍵も

黒辺 「オススメしないなー」
仁 「部長は私ですー」
黒辺 「あつそ」

窓を開ける。波の音。風が吹きいの。

仁 「はーっ、うう天氣……兀わかなやんかんのか来てんのうが、うう風がーーー」
ヨウ 「……？」「は？」
仁 「ふう……お……？」
ヨウ 「く……？」

「5」

波の音

深月 「つと……校舎裏の倉庫って……あ、あつた。あれかーーー」

ガララと倉庫の扉が開く

深月 「くひーーー」
七海 「……？」「あら？」
深月 「じ……じつむ……」
七海 「……、何か？」
深月 「じ……じべ……？」「え……」※七海さんはだけてるじつの氣がある
七海 「……じつかした？」※取り繕つて
深月 「じい、じえつ……、先生に頼まれて……？」「えつと……七海さんはソリでなにを……？」
七海 「機材の手入れをね」
深月 「ボンベ……？」
枢 「……あ、深月」
深月 「枢つ」
七海 「……お邪魔みたいね」
深月 「そんなつ……」
七海 「良いの？」「好きにして。私の用は済んだから先に帰るわね」
深月 「七海さんひー」
七海 「後、その教材はその倉庫じゃなくて隣だと思つわ。廢材置き場はそつち」
深月 「あ……ありがとござらまわ……」
枢 「は？」「繕じやなじの」
深月 「手伝い頼まれたの私だけだから多分部室だと思つけど」
枢 「ふーん……」
深月 「……？」「枢……？」
枢 「……七海さん」
七海 「なに？」
枢 「一一別れよつか」
七海 「……はい？」※何を言われたのか一瞬分からず

極 「俺、深月と付き合つていいにするか」

深月 「なに言つてんの極ー？」

七海 「——、……本氣で言つてらるのかしさ……？」※落ち着いて見せて

極 「わりと」

七海 「……好きにしたら？」※毅然とした態度で。しかし動搖して

極 「うん」

深月 「かつ……極ー？ 私は別に——」

極 「悪い、深月」

深月 「んつーー？」※キスをされて。フランソワなど落ちる

極 「…………」

〔深月「極つ……？ なんでも……」〕

仁 「は——」

〔深月「——仁……」〕

深月「んつ……んう……」※必死に抵抗するが力が強い

仁 「つ……あ……、ン……」※逃げ出す

ヨウ「仁殿ーー」

〔深月「ヨウちやんつ……」〕

黒刃「あーあ……」

〔深月「なんでも……」〕

深月「つ……」※突き飛ばす

極 「んおつ……」

深月「はあつはあつはあつ……！」——、つ、ン……」※極にコンタ

極 「つ……」

深月「最低つ……」※涙目

極 「……」

深月「つ……ひつ言つつかり？」

極 「違うの？」

深月「つ……」※睨む

極 「冗談だよ。そんな目しちゃダメ。誰も深月が俺のこと好きだなんて思ってないから」

深月「だつたらなんで……？」

極 「……なんとかく……」※仁がいた部屋を見上げて

深月「はあつ！？」

極 「……じつめたくないつちやつんだけね。必死なの見てるし」

深月「……先にキスしたのは私だから謝る、だめん。……け、かわいしないで。私は……、……私も……かわいしないから」※極とは違うと言つたから同じだと思ったので

極 「うん」

深月「それ片付けへりてーー」※仁を探しに向かう

極 「……最低か……？ そりやそーだろーな」

深月「（走つてらる氣遣い）」

〔深月「——つのぶつ……」〕

黒刃「続く」

「7」次回予告

深月・黒辺「次回予告一」

深月 「七浦さんって色っぽいよね～～、ちちひと癖つ毛な髪とか黒い皮とか……モデルさんって感じで憧れちゃうつ」
黒辺 「昔から可愛かったけど急に化けたよねえ。可愛らしく綺麗。」
深月 「スタイル良くて胸も大きいし、同性ながらシキシキしちゃつ～～」
黒辺 「下着もなかなかエロくてそそられるも」
深月 「幽霊なのをじらうことにやりたい放題しちゃないですか？」
黒辺 「取材は習慣だよ？」
深月 「次回～～ カラーティスト 第8話～～ 名探偵山川ちゃんが見た～～ 海底に眠る桜の真実～～」
黒辺 「乙女の秘密、明かしてみやがうそ～～」

「8」

仁 「番外編・あの日の夜」

仁 「やつてしまつた、やらかしてしまつた」

仁 「あ一つやつ～～」※ペラメタバタバタ

仁 「もうとにかくして、深月ヒキス……しおきつかんで～～」

仁 「明日からじつらに顛して余裕はさらめ～～」
仁 「なにしてんの、お前」
仁 「勝手に入つてこなはじめ～～」
仁 「俺の本持つてつたのそつかじやん……文句あるが、勝手に持つてくがむ」
仁 「むう～～」
仁 「なに。じつかしたの」
仁 「……初めてキスした時……じつ思つた」
仁 「……はあ？」
仁 「だから～～ 初めてキスした時なんとも思わなかつたの～～。最初の子だつて2週間もしからうちに分かれてだじやない～～。あんたつてそーいう男なんでも～～」
仁 「いやらや、じつらの男なんだそれ……お前の中の俺はじつなつてんだ」
仁 「普通に軽蔑してる」
仁 「あつそ」
仁 「それで？ じつだつたのも。……やつは『こんなやつはするんじやなかつた』とか思つたわけ」
仁 「……キスしらじ、大じでやするだる」
仁 「そつじやなくて～～」
仁 「唇重ねたから～～でなんとか照れねえも。……めんくわらうまでその先だ」
仁 「その先つて……、待つて～～ そつらつの私にはまだ早い」
仁 「じゃなくて。馬鹿か」
仁 「はあ～？」
仁 「じつでわらうやつは『好きだ』つて言われる方がめんくわら」※めんくわら
仁 「あんたつて……思つていただの最低ね～～」
仁 「知つてる」※じつでや良じ
仁 「……じやや、あと一回だけ……、聞きたらんだけ～～」
仁 「がに」
仁 「……好きだけひやわ倉ららひかそつらんじやがくつ……、……あと傍に居たらどうか……そつらのめ～～うわらひ思つ……？」※濃く乙女
仁 「……別に。……迷惑かけがわらうやわら。そつらのめ」
仁 「そつか」※よかつた

極 仁 极 「んじや、これ返してやらつかう」
「うん?」※||口||口
「……はあ……」※なんかやだなー

門 仁 「——明日……深月と話す……怖い……」

極 「続く」

門 仁 「〇〇役xxです。木下トマト『カラーティスト』がYouTube、Podcastなどでの配信の他に、私がHontoでやシナコオなどを封入した有償版の配信を行なっております。第一話、第二話のときは『番外編・クジラ猫の冒険』、『番外編・あの日の夜』。（通常に1言口メロを追加してくださる）。詳しく述べはスタジオ『カラーティスト』公式サイトをご覧ください」

あるの？」

仁 「違うわよーーー」

七海 「なにムキになってるのよ」

仁 「んつ……違うの、やつじやがって私は……」※私はやつじよ

七海 「どうやがよ、どうしてくれがよーーー」

仁 「う……うふ……（※私はやつじ）私たつて貴方をじつりやつじよかなくて……喧嘩つてうつか……泣かして

こ、見られたくなじだるーがーーか思つて……」

七海 「泣いてた？ 何処の誰が？」

仁 「隠しきれてながらーーー 真の赤つかだからねーーー 四ーーー」

七海 「……、……泣いてながらわよ」※拗ねてる

仁 「わよーーー んじゅくわーーー」

仁 「……極と……何かあつたんですか」

七海 「はう？」※強調そうじ

仁 「てうつか……別れたのかなつ……て……」※そつだもしたら深月と付き合つてゐるのも経験からく

七海 「……」※はがーん

仁 「なつ、なによその顔ー」

七海 「じじえ？ ただ、私と極くんのいじ、興味をじと見てたから」

仁 「あいつが誰と付き合つたん勝手だけよー これが女たらしの姫だと思われたくなじんですかーーー」

七海 「妹でしょー？」

仁 「違うー！」

七海 「変わつた子ね」

仁 「じつちがーー」

七海 「ふー……。……モーね？ フタれちやつたのかしり」

仁 「振られ……？」

七海 「なあに？ もちが私か振つたじでか？」

仁 「ふ……ふ……でもーーー、えええ……？ それで深月……？」※理由として考へればそつなのだから、そういうことは思へない

七海 「深月せんじ……？ なるほひ……、そつうつじなの」※一べで納得

仁 「なんですか」※むつ

七海 「愛されてるのね、あなた。羨ましじわ？」※素直に。けれどには嫌味にむ闇といえる

仁 「はあ……？」

七海 「……極くんのいじ……好まへー」

仁 「はつ？ なによ言つてんの、好まなわけないでしょあんなやつー」

七海 「じやあ嫌ら？」

仁 「じつちかつてうつし……嫌らつてほひじやがらけいムカハレ……からから癪に触るつてうつか、目隠りでか……」

七海 「（クスクス笑う）

仁 「なによおーー」

七海 「報われなうなーつて思つてね？」

仁 「意味不明なんですねじ」※わひすり

七海 「はあー……なんだか滑稽ね」

仁 「喧嘩売つてます……？」

七海 「貴方のこじじやがらわよ」※苦笑して立ち上がる

仁 「あ、ちちつーーー」

七海 「やひかつんににじだらー。あなたかひじり顔してるから」

仁 「んうつ……やつつ……ーーー」

ガララ

深月 「ー？ なつ、七海やんーーー？」

七海 「あら。じつかした？ もしかして私のいじを隠してうだのかしら？」※余裕がる

深月「うえにせ……ひらのか……私に極はなんじやめりまやんから……だから今おし極い語して」から今おし極い語せば極もー」

七海「深月さん」

深月「はう……？」※なんじつもー

七海「前にや語しだけれど、私や極はなんじやめらのむか? だからそんな風は」

深月「違うよー。私にそ極は本番リ……。それになんじかんだ言つてお一人つてお似合ひです」極もあんなんじか? やね? 七海さん? おれがだよ思つてます。七海さん綺麗だし、極があんな風に誰かうるんでるんじゆん」

私も見たことなかつたし……」

七海「私は別に極くんじやがくたつて感うのむ?」

深月「え……」

七海「余計な説教はせず、側にうつてくれるのなら誰たつてうらや? それはやつし極たつてうら」

深月「そんな……」

七海「……誰かの代わりにだなんて誰にやめられたら? そつどしつか」

深月「ひつらい……? ですか……?」

七海「極ひかやうかねら人のむか? 極ひかやうだのむ……。その人へとつひしつかの感うい感うい」

深月「…………」

七海「諦めるか? 諦められるのかか……前に進めやうが、躊躇して、躊躇しがらじと感うが」

深月「そんが……(※事ありまやんも、ひせ語へら)、私は……良くねかのまやくが、誰かを極ひかやうかねいなんて……。思ひたくあります」

七海「……純粋なね。あなた」

深月「……」※自分でシカに極ひをせがれあはらる

七海「なんじむなじわ? おれで」※少し落ち着きにかけてうれいを自覚

深月「七海さんは? (※震える音で)……極のむか? 嫌いなんですか……?」

七海「……言ひたでしつか? 好むか嫌らじか? やつらの語じやがうね。……ひつじやううの、……私は。——じやあね」※苦る

深月「七海さんは? ひ……七海さんは? それで良じんですか……?」

七海「……」

深月「そつやつて……自分で自分のむか? まじ語かわるみだらはして……それじうらじうか?」

七海「……そつや。それやねねか? やつぱり私で……貴方のむか? 嫌らじわ?」※苦し紛れ、冷静を保て

深月「七海さん……」

七海「そつやつて十足で諦め葉らすの? ひつかひ思つわ?」

深月「七海さん?」※壁ひ止めるが、

去つて行く七海

深月「……か? わかんじま? 私には」※わかれてる? やはり。

「3」

ガロハー

仁「ふあー?」

深月「……?」

仁「つづ……だ……」

深月「仁……」

仁「深月……おはは……おー……」おれ……隣りが「かの語れがら?」

深月「……ひん」

ガロハ

深月「えつじ……」

仁「……」

深月「……おのや? 仁?。極のむかなんだけ?」

深月「……やっぱり……最低だよね……」 //ミキ——?」

「4」

۱۱۶۱۱۶

■深月「もししたら良しのか分からぬ」とだけだ。

【深月「……え、 三ツ井……？ 善次どのが死んだら私が私わからんがうめ……。 本当に私が決めてうるQ……？ 三ツ井はそれでうるQ……？ 私は……三ツ井にはなれんがうんがうめ……？」】

深月「『ミシキを守るために生まれた存在。……その私が、ミシキに助けを求めてる……。なんて、本末転倒もいひつけだ。だけど、なんでもかかった。ミシキに一言『頼むよ』ひどくなんでもうじから言って欲しかった。……そしたら私は——』」

深月「『ミシキの魂になら……なんだって……』」

深月「……がのに。ちゃんと聞かしておぼえの主人（あやし）は、なにか言ひてはくれなくて——」

「ボボ

「6」

波打ち際、校舎裏の。

七海「……あら……深月さん……」

深月「七海さん……」

深月「そんな肺だからこそ、誰かの語で、気を紡うわしたかったのかもしれない」

深月「何処かで七海さんを隠してしまった」

七海「珍しいね、独りだなんて」

深月「七海さんこそ……」

七海「それって嫌味のかつらへ」

深月「え……」

七海「（くすりの葉で）『誰も』の間はいのんぢやうだ？　ひら御く浦たでしおひだれ？」

深月「え……」

七海「……風が氣持ちいいね。ここは」

深月「……よく来るんですか？　ここ。特別棟の裏つかわってあんまり人にならって聞かっていたので……」

七海「そうね。一人になりたい時は割り」

深月「……怖くないんですか……」

七海「海が？　平気だ。取つて食われるわけでもあるまいし。こんなひどいにがでダメややつては来ないしね」

深月「そう……ですもね……」

七海「私に……何か語があつたんじやないの？」

深月「すみません……やつぱり極ひはいのまがじやうけならじ思つてて……」

七海「またその話」※溜め息混じりに

深月「でも——、私が原因だとしたら」

七海「潮時かな」

深月「く……？」

七海「（※苦笑。本当に察しが悪い子）……ね、好きな人がいたのも」

深月「え……？」

七海「ずつと、懼れていたわ？　……今思えば初恋ね。すくなくとも……優しくて……、……愉快な人だったわ。けれど私は迷惑をかけてしまつて……じがじやもう想いを伝えるひいすらでもう」

深月「それって……？」

七海「……死んだの」

深月「——」※黒刃さんと繋がる

七海「身体が丈夫な方ではなかつたから、糞たはしなかつたが——……」ううえ、嘘ね。しげりくの間、……あの人遺体を見てからか信じられなくて、よく一人で話した場所に遭つたりもした。……当然誰も来てくれなかつた……じがじやもつ、私は海の中にも入れないだけじね」

深月「七海さんが溺れちゃつたつて……それが原因で……？」

七海「わあ？　……でも、そつだもつだの——……」……うう口実だつたわ？　——だつて、そつだもつは『あの人から離れられるわ——』

深月「……」※ほかーん

七海「……？」

深月「え……」

■深月「たたーー、たたー、そんな風に語る七海さんの姿が、胸しづて、心が沸いてしまった方がほんと傳くて、綺麗で」

深月「……まだ……好きなんですね」

七海「じつかしら？」※苦楽

■深月「すりへ振しそうだったから……」

深月「……極はその人の代わりですか」

七海「彼たって、私を彼女の代わりにしてしまったから——彼女は僕だと思はなう？」

深月「極の好きな人って……」

七海「もしかして姫ちゃんじゃなく？」

深月「え……」

七海「……呆れた。……姫にはしゃべりながらね。だからながらの顔を眺めながらか眞面目。『姫の體様』※立ち去るうつむいて

深月「すみません……」※素じが悪くて

七海「……彼のそーういひは私たって嫌いじゃね」

深月「……？」

七海「私も、あの人以外を愛するとは思えないから」

深月「——」※触れれば壊れてしまったやうに泡につ

七海「それじゃ」

深月「七海さん……」

■深月「たつた一歳、私たちよりか一歳しか違わないのに七海さんはとても大人びてて……、なのに」

七海「極くんにはもう少し伝えておいて……」

■深月「その笑顔はとても子供じみてしまふことに感じた」

極「続く」

「⑨」次回予告

深月「ねえ、極の好きな人って」

三上「なんかそつこないで鍼感だよね、数々人のいい鍼感呼ばわりするくせに」

深月「いやいや、こいつが、三上は分かるの？」

三上「子供の頃からずつと変わつてな感じがする。多分」

深月「うそ……じゃあ私だけ……？」それってには知ってる？ 私だけ気付いてなかつたりするの？」

三上「深月……」

深月「くつ……？」

三上「いや、気付いてな感じがする」

深月「なーんだ、じゃあ良じやん？」

三上「そつだねー……？ 次回、カラーテイスト鍼の語、心効かぬしも極ちゃんー」

深月「ほんと七海さんって意地悪だよねえ？」

三上「ハア……」

「10」

七海「8.5話 校舎裏のひと時」

波の音

内七海 「この海が私を抱むようになつてから、もつ何年も経つ。街の、それなりに大きな病院で検査してもらつたことがあるけれど……この体質になつた理由は不明だつた。言つなれば、精神的な問題。心が海に満つることを抱んでいるんでしちつとも、お医者さん達は口を揃えて言つた。……医学的に問題がないのであればど、今ではもう、面霜も『気をつけなさい』としか言つてはなかつた。——無禮、極く珍しいやうな言ひ方では出歩く度にそれなりに心配せられていたのだけど——」

七海 「信頼されてるやうね——、彼……」

内七海 「一目見て、同族だと私は思った。入学してから彼と顔面で顔面で隣り、ふとその複雑な気になつて振り返つた先で彼もこちらを見つめ返した。それから驚くほど単調に、そして単純に異性の仲人と軽々落ち——」

七海 「はあ……」

内七海 「一人の階はモノの校舎裏に來ていた。潮風が心地しか濃く、それでいて午後から日向になるこの場所はお気に入りの場所の一つ……、お気に入りのうまいお酒がお隣に隣に近いのだけど。……寂しさを紓ぐのも、酔お酒の」

七海 「がーんてね」

内七海 「泣りすまだよ、自分でわかつてる。だけど、氣を紓ぐやうな相手は何処にやらなくて——」

七海 「こんな私を見たよ……あの人には出でてやれるかしない……」

内七海 「例えそれがやうらん想い、自分がいた」

黒辺 「続く」

【⑨】「聲口に芽生えしゆの」

「一」

深月「山は可憐ひつら。しかるる『女の子』にて感ひでわいおやして、小動物みたいで。明るく元氣なところが可愛いくて、男子にも人気がある」

深月「……七瀬さんも綺麗だ。スタイルは良くて仕事も可憐で、誰がどう見ても美人だって言ひ」

深月「だけど私は……」

深月「…………んう…………」※鏡に映る自分を見つめて

深月「…………」※鏡に映る自分の姿は……嫌いな自分がなりなんだから

深月「——かしこも可憐くがわい」着飾っていた自分がバカみたいだった

「2」

□入□入

深月「……？ 极……？」

「おおお、少し波が高う

极「懸け、どんな時間に。寝るひとしたつだ？」

深月「ううん、まだ。……腰が痛くてたまらなかい……ひとしたつへ、なんかあつたの？」

极「七瀬さん……見てなさい」

深月「なに……？」

极「歸つてからひつらべた。うつむ家がで送つてだから俺といつやからかで連絡あつて……、……心臓だりないか」

深月「ごめん……わかんなう……」

极「そつか……、いや、うう——、悪かつたね」

深月「ううん——。……極……？」

极「なに？」

深月「今から探しに行くの……？ なんか海も荒れてるし流れわれたら……」

极「そりやそつだけじ、あの人のが危ないでしょ」

深月「……つ、私も行く」

极「は？ なんで深月まで——？」

深月「心配だから。ちよつと待つててー」

极「……」

深月「カラーティスト 第9話「聲口に芽生えしゆの」

「3」

深月「おのゝもの七瀬さん、相手にいために。そんなにかじだらうか？ もつかれてるやあねー」

深月「ハイム、一応浮き縛……あひはーー、……？ ……あれ……？ ——……口か……かやん……？」

深月「七瀬さん、かじなくないかーー、……そしてわからば、口かやんが消えていた」

「4」

波が高い、風が強い。雨も降り出す。ガララと扉が開く

深月「ふあーっ……びっしょりびっしょ……」

黒辺「おやおや、こんな夜更けになんたい」

「勝手に入つていいの」

深月「緊急事態ですしお、……そつしえば極には見えてんの？」

「なにが？」

深月「や、見えてないならいいんだけど」

黒辺「おーい、無視かなー？」

深月「七海さんか消えました」

黒辺「……なんだって？」

「深月……？」

深月「黒辺さんなら心当たりあるんじゃないですか？」

「……誰と話してんの」

深月「幽靈部員の黒辺真夜先輩」

「はあ……？」

深月「七海ちゃんのところ、なんかずいぶん気にかけてるみだらけだから。……何か知ってるんじゃないですか」

黒辺「……検討がつかないな」

深月「嘘が下手すぎです。早く吐いてください」

黒辺「やれやれ……、神社なんじやねじかな？」

深月「神社……？」

黒辺「だけど今はもう海の底だ。……七海はいま潜れなんだろう？」

深月「……行こう……極一一」

「なあ、黒辺真夜って一〇年前に亡くなつたあの黒辺真夜？」

深月「……？ 多分そうなんじやねじかな……」※黒辺の表情を見て

「……本当にいいの？ そりつ」

深月「一応……そこは……」※ドロドロを感じておもひこ氣圧されてる

黒辺「黒辺真夜がここに……」

黒辺「……さて、なんだろつね」

「……じや、行こう」※瞳を返す

深月「えつ……？」

「死んだ人に頼つたつて仕方ない。しかもせやつじなう人なんだし」

深月「でも黒辺さん……あ、ちよつと待つてよー、極つーー」

ガララ

黒辺「……じなう人で悪かつたね」※苦笑

窓ガラスに打ち付ける雨、風。高波

黒辺「……七海ちゃん……」

「5」

△水△

深月「ちよつと極えー」

黒辺「息できがらからつて潜れないわけじやねら。校舎裏の倉庫には酸素ボンベとかあつて……、たまに七海さんそれ使って潜つてたーー、だから」

深月「でもこんな海でつ……」

黒辺「だから急がなやつ……、あの人ーーたまに無茶するからーー」

深月「……黒辺さんのこと、何か知つたの？」

枢 「別に。……興味ないし調べたりとは思つたこない。……でも、七瀬ちゃんにとって大切な人だつたんだろ? かつてこなは分かつてたから」

深月 「……枢はわざと七瀬ちゃんの匂い……やつぱり好きなんだ」

枢 「違うよ。ただ……ほつとけなさんだ……ああいう人……ムカつくんだね」

深月 「……そつ」

仁 「深月……」

深月 「仁……」

仁 「つと見つけた……」 枢 「ちよつと待かなせり……」

深月 「ごめんつ感じてるから……」

仁 「あつ……やつ……お母ちゃんが配してたよ……からなり家出しがしてたのやつ……」

枢 「危ないから家歸つてろ、俺もすぐ戻る」

仁 「一人で帰れるわけないじゃん……」

枢 「……つ」 ※停止

仁 「わわわつ……急に止まんないよ……」

枢 「お前は帰れ」

仁 「子供扱いしないで、枢が帰んないなら私も帰んない」

枢 「危ないだろ」

仁 「どつちがー」

枢 「……」

深月 「むうつ……」

仁 「あつ……七瀬ちゃん見つけて引か上げればこうやつ……ね?」

枢 「七瀬ちゃん? 七瀬ちゃんがどうかしたの」

仁 「お前には関係ない」

枢 「気になるつやん」

仁 「……じつからお前はつてに帰つて。母ちゃんはわざと戻つて伝えつてくれ」

仁 「あ、ちよつと枢……」

深月 「仁……」

仁 「……あんな風に言われて帰れるわけないじゃんね?」 ※済がり、深月に同意を求める

深月 「……わかった。一緒にいく? 実は用事があるなくなつて……」

仁 「え……?」

パーシと荒れる海

M 深月 「漁が荒れるといふ意味は珍しくない。海流も、時々漁そのものが生き物のものにひだり回るといふことが多い。だけど、今夜の海は異常だ。……嵐が近づいてるつていう話は聞いてたけど、何か……嫌な予感が……」

仁 「見えてきたつ……」 「本漁はこんな感じるは……? 真っ暗でこれが何がなんだか……」

深月 「わからんつ……。でも黒刃ちゃんがここたつて言つてたし……」 それに――」

M 深月 「黒刃ちゃんを見つめたのも、この近くだ」

枢 「つ……? 七瀬ちゃん……」

仁 「枢? 」

パホホ

深月 「――そんな……」

M 深月 「漁は、私がいひてそれは島のや近く、地上よりも深めに存在したもの」

枢 「七瀬ちゃん? しつかりして……」

仁 「私も手伝つて――」

深月「勝手ひやひやかのれるほひ怖い一面を持つつか、私たちを呪ひ込んだへれる。……そんが、優しさのたゞ思い込んでた。だから——」

（悲劇）

枢 「……シ……大丈夫、島はあるつ……氣を失つてゐただけだ……上に運べば——」

仁 「深月——」

深月「くつ……？　んあシ——？」

（悲劇）と海流に飲まれる

深月「へ……」※上下反転、視界が回る

（悲劇）深月「溺れるなんて——私は——」※氣を失つ。見た事がかつた。想像でつかつた。

（悲劇）

「6」

日向「嫌です——私も一緒に——」

三浦「——わかっておくべき」

日向「つ……その想いは嬉しいです……嬉しいのです……ですが——」

三浦「じめんね。だけひ、君を連れてはいけない」※頭を撫でる

日向「シ……ヒロ様は……するのです——」

三浦「ひとつからつかまた————いや君は自由だ。だから——」

日向「ヒロ様——」

三浦「いやあね」

日向「ヒロ様も——」

深月「……今……」

日向「自分が……實めましたか」

深月「日向ちゃん——」

日向「……すみません……急に家を飛び出したりして……仁蔵から借りた本にちのひの人に奉納されてしまったので……」

深月「……～。TNNは……」

日向「私が眠っていた祠のすぐそば。深水神社へ呼ばれていらるそひですね」

深月「……～。こんなひのいしてね場合じゃねら——。七浦さん……——。……～。日向ちゃん、帰る？——」

日向「私は……帰りません」

深月「へ、ええ……？」

日向「七浦様でしたらだら無事です。……TNNで溺れそつにになつてからひつかひたので、私が泡で呪ふでもかまし

た

深月「日向ちゃんが……？」

日向「これを」

深月「……～。鈴の……豪飾り……？」

日向「あつと隠してましたのです……だから奉納されてしまひ聞こえてるやうやく。……眞實さんはありますか？」

深月「わふく、子供の頃の記憶はねむへい。……昔は手伝ひて巫女とかやめられてたつぱんたはひと私は——」

日向「では、そからなの、三浦様では如何でしつか？」

深月「……く……？」

沈默

日向「……おみじのいを申してらみ眞實はひねらね……。たゞ深月様の中には『元の深月やも』がねじねじつたな気がしてならないのです……。それにその方がおのとお——」

深月・ミシキ「仁一一」

ヨウ 「仁慈を援助せしものへ……由てこうひきつだもとに感じられて……」
深月 「が……なに言つてゐる? 田中ちゃん……?」
ヨウ 「深月様は、そちらの深月をまじでか、ヒロ様なのではおりませんか? ……」
深月 「えつと……」※それは良くわからない
ヨウ 「思ふ由つてくだらぬやつ……」
深月 「性別こそ違へど、面影があるのです……」ヒロ様一」※訴えかける
ヨウ 「が、田中ちゃん? ……」

三三三井「.....深月」

深月「……！」

Σ///シナ「少し……変わるね」

「——ノリヤイホセ、アタマホテレ。アタマホセテコトノリヤイホセ……。」

「うー……えへん……」申し訳なげんだけれど口調は一

且ウ 「ヒロ様ひーー」 ※抱き合へ

「？」とわざと（）

「月深」の「月」を「ム」に読み替えたもの。

「リーフ様……リーフ様なのです……やせの賑田や井せり口様でやられたのですね……？」

「……（※その意味を受け止めつつ）残念だけど業はその匕口様って人を知らないし、君とも初対面だ

「わかつてたります。心と肉体は別のやう。今のレーベンにその記憶がかないのは仕方のなじみのやうです」

ミジキ 「君は一体……何者なんだ？」

「私は海神（うみのかみ）・海神豊玉彦（わたみつみつひこ）様が妻、アマザトミハヤヒコ様が夫」

三「海神……？」

三九 「そして、貴方様こそが海神・海神豊玉彦様でおられます」

深月「……つらいけないんだけど……」

深月「深月……？」※わかるの？

「シキ「この子に会つてから変な夢ばかり見るんだ。深月も覚えてない? なんだか随分昔の、……まだ海がこんなに広くなかった頃の景色」

深月「……海が狭い……？」

前からおかしな夢はたまに見てただけだ、最近は鮮明にならなくて、いつか……

【深月「いやいやいや、なにそれ前世の記憶とか意味わかんないし……」】

「」
「」

「いや、幽靈はいたけどだからってそんなつ……、ええ……？」※言じられないけれど実感はある

ヨウ 「もう一人の深月様が混乱していらっしゃるのですね」

『深月「そりやそりだなー、うそだりそりだー、……信ひのぞめか……」

「」

深月「今日」海上に流おをめた。海流に流されながら、七浦さんはもつといふん気持ちたつたのかなつて思つた

深月 「つ……あつ……—」

深月「息が——、水が、口に、」

カプカと海辺に浮かぶ深月

深月 「……満月だ……」

【深月「気がつけば、私は一人、海面でぶかぶかと浮いていた】

深月「嵐の目から差し込んだ月の光が周囲を照らしてた。静かに、じんわり、胸の奥でくほつかれて跳んだ。夜空の透き通った空気が染み込んでくるもじで、痛みすらも感じず、手に取ってみた。『何かなう』」

深月 「みづき……」

『深月「//」サガ、『トト』にもいなじ』

深月 「……？」

仁 「ちうつ……心配したよー? 大丈夫……? 垣我してない?」

深月 「ああ……ん……？」

採用「………：該款帳面指之行」

深月「…………！」※ほほほご涙を流す
二「…………」

「…………なにか……あ……たの？」

【深月】「——何処がで、いつも感じていたその存在がなくなつただけですぐく細くて、肌に触れる海水が冷たく

第三部分

ノ隊用「火薬」の「火」は「火」の「火」ではなく「火」の「火」である。

八書「瓶」

〔三〕 次回序書

日文：(1) おはよう

「このまま持つてお田方にやう業が

「おお！」それから少しあはれの体でしゃぶしゃんだ。「おお、おお、おお！」

「これが『三か三か』のそつこの意味をばかれて……」業は呟いてさがる。

「……………」僕は君とお別れする。お別れする。お別れする。

「アミベバアハシチニルナアベヅケテヤエツジナのでは?」
「アハ「日アカアミベバアハシチニルナアベヅケテヤエツジナのでは?」

ヨウ 「いえ、これはヒロ様の口癖です」
リリヤ 「嘘でしょ……？」
ヨウ 「アリスコペイケイケだったのですー」
リリヤ 「く……くえ……？」
ヨウ 「次回ーー カラーティスト第一〇話、『姫』太郎さん茄子ー 来る日も来る日も夢見ておりましたやー」

「9」

黒辺 「9.5話 極と真夜」

極 「扉開ける」
仁 「わかってる……ー」
黒辺 「つ……」
極 「つしょ……」
黒辺 「七海ちゃん……？」
極 「はあ……」
仁 「そんじや私はつ……」※深月を探しに行こうとする
極 「待てーーー」
仁 「やだよーーー だつて深月がーーー」
極 「あいつなら平氣だ。流されたぐらうドンつにかかる奴じゃない」
仁 「なんでわかんのよ……」
極 「お前だつて分かるだろ。なんだかんだいつて深月は強いや。心配なのは分かつけど落ち着けシ」
仁 「つ……わつらうーー」※部屋を出て行く
極 「仁ーーー つとむわつら……」
七海 「んう……」
極 「……馬鹿なんだから……」
黒辺 「……氣を失つているだけか……」

惑ガラスがガタガタ震れる

極 「この人が死んだらあんたのせいだからな、黒辺真夜」
黒辺 「……」
極 「……いや……違うな……」
黒辺 「はあ……お互ひ苦勞するねえ、極きゅん？」
極 「……」
黒辺 「生憎業は君がいつうつに『わつらう』、だから結局は傍観者でしか無らねやれ。つまりこれは君の氣もぐれが招いた結果。君の性格の悪さが起つた必然ともいえやうやーー。朱鷺が未に沈み消えようとしている少女になんと言葉を届けようか、……なんとも憐けない話だけじね。目の前で繰り広げられるねハナシに手を加えられないつてのはさ」
極 「俺も……この人も……多分……一番大切なヒトは譲れないんだと思う……。……だからきつひ……ひうしたつて諦めるしかなん……だけひ……」
黒辺 「…………」※見届ける
極 「だからつて……何も感じ無いわけでもない……」
黒辺 「好きなんだろ？ 七海ちゃんのヒトが」
極 「……」
黒辺 「精神は肉体に引っ張られるもんだ。その逆も然り。切つても切れない関係にある。ーー君が七海を抱いている間、僕が何を感つてらはらひじや思つねや。口ガキーー」※結局、黒辺や七海が大切
極 「……(苦笑)」
黒辺 「は……？」
極 「呪じ縛をねがひつてヒトはおんたは諒めてくれてんの？ 僕たちのヒト」
黒辺 「ーーー 誰がーーー お前なんかーー」
極 「(立ち上がつて、黒辺を見上げるヒトにして) もー……それはひつかわかんないけえれ」
黒辺 「んう……？」
極 「悔しけりや指くわえて見てないでなんとかして見せてよ、先輩」※七海の恋人としての意味も含む

黒辺 「……」
極 「……なんとかしてみるも……」
黒辺 「……はあ……。君は本当に不器用だねえ……？」
極 「……つ……」
黒辺 「……なんとかできるが少しつづてくやが、はかやのめ。君が言つたんだろ？ 僕は——、……僕は、もつつかい人なんだよ。……浅倉極くん……？」※だから君がどうにかするんだ」

七海 「続く」

「——」

極 「〇〇怒××です。オーティオドラマ『カラーティスマ』をYouTube、Podcastなどでの配信の他に音書かHuluなどでやフナコオガジを封入した有償版の配信も行なっております。第9話、第10話の音書かは『8.5話 校舎裏のひと時』『9.5話 極と真夜』。(通常は1話1メメント追加してくだせら)。誰しもはスタジオ『カラーティスマ』がカラトを耳に聴くんだから」

【一〇】「追憶の渚」

「一」

仁 「ほら中入つて深月ー」※ガラガラひと部屋の扉を開ける
深月 「私……」
仁 「つと……誰かタオルがひこうは……ーー」
極 「俺、廊下出てるわ」※出て行く
仁 「あーあー、もうひ……ーー なにがどうなつてんのよ……ーー」※腰を拭きながら
深月 「//シキが……」
仁 「なに。じつたの。……なにがあつたの」
深月 「つ……」
黒辺 「ひりやがた……なるほんねえ」
仁 「なによ」
黒辺 「女の子にやれやがつたねがた」
仁 「はあ……?」
七海 「……腰がしじわね……」
仁 「七海ねべーー」
七海 「ひ……、ヒヒは……」※軽く目眩
極 「目、覚めたの」
七海 「極くん……」
極 「具合は?」
七海 「平氣よ……」※少しつらづらするけど
極 「……帰る」
仁 「いやいやかよひと彼がなたしよー なんか他にあんじよー」
「他につて?」
仁 「例えははり……無事でよかつたーいか……」
「当たり前じやん」
仁 「そつじやなくて」
「お互ひ踏み込まなつて決めてるから」
仁 「はあ……? ちちひと極ー」※追いかけよひするが扉を閉められる

ガララ、ピッキ

仁 「ひ……わつわ……」
黒辺 「困つたもんだねえ……?」
仁 「……?」
深月 「//シキーーーーー」※腰を抱えて、小さくなつてゐる
七海 「ひめんがわら……」※仁に抱つて
仁 「ん、ひ……ーーーー あーひわーーー なんのよよー これもアー?」

深月「カラーティスト 第一〇話、追憶の渚」

「2」

//シキ 「深月が本物の深月ひだりよかつたのにね」

深月「一度だけ、冗談交じりにそんなことを言われたことがある。街で男の子に痴口され、断つた末の夜だ」

深月「そんな//シキは自分で腰くほひ区発したのを覚えてるーー。……たつて深月は……本物の深月は//シキの方で。私は……そんな//シキを庇つたために生まれてきたんだから。……それにその頃には、私はわつーーーー。……、ずつと一緒にはいたからかかる。ずつと一緒を感じてつたから知つてるーー。……深月は、私の知つてる深月はーー、彼以外に、ありえないとんだ。……だから私は……」

深月「!!! シキに会いたいよ……」

■深月「一人では、生きていけない」

「3」

仁「分かる……？ 深月……」

深月「……仁……？」

仁「……何があつたの……？」

深月「私……えつと……」

仁「……？」

七海「……声を……聞いたわ」

仁「……？」

七海「けど……あの人のじやなかつた……」

仁「んあーつむつむつ……。ソルトの抽せんがのんがーーー。かわいと黒辺ー。黙つてなつて何が言つだらひつたのよー？」

七海「つ……へー」※黒辺もじらつ御船には及ば

黒辺「あーあ。僕は知らなじやー？」

仁「ぐ……え……？」

七海「ひつひつ貴方がその名前を知つてらるの……へー」

仁「いやだつて……黒辺せんの船の幽靈船員じ……せらそり……」

七海「つ……？ 幽靈船員……？」※意味がわからぬ

黒辺「んあー……。……やつは見てなうひまうねー。いや、当たり前なんだけれど」

仁「……あー……信じてからえなくてケシコードすかん……地縛靈つていつか浮遊靈的が……？ ……来つたら来いなやじまへー」

七海「そこに……うるの……へー」

仁「……うやうしら目でもんだのん見てるね。じるじるんだ」

黒辺「全く君つてやつは……」

仁「本音のハビドコロー」

七海「そんなんじつて……」

黒辺「ありえなつて最初は僕も思つたけれど、……世の中不思議がもんだけれど。10年前に死んだばずの僕が今にいはうて、つかわそねが七海ちゃんにバシチャつたつてんだから。長生をするもんだけれど。つてゆう死んだばつてるんだけれど」

仁「七海やく取り合ひなの？ ノラヘン」

黒辺「ノラヘンはわりには離はなれ？」

仁「本音のハビドコロー」

七海「貴方には……見えるし聞こえるの……へー」

仁「浮いてなあや幽靈つて信じたからシロにはね。つていつか深月にも見ててるっぽう」語る見る人らねんじやなうの？」

七海「つ……」※涙ボロボロ

仁「はつ……？」

七海「わは……」※泣いて涙はまじまじだら

仁「わは、わはつと黒辺へー」

黒辺「僕に言われてわねえ……。ソルトの目でやれやれやしづらのソルトソルトでいつかだら。君が僕の言葉を代弁してくれるのうらわー」

仁「その前に何がじつなつてるのか詫問はして欲しきんだけれど」

黒辺「そのつまうはなじから、……そつたな……しきたりがむーーー」

仁「……？ ……だりぬんね……？ ……つ……？ それが何……？」

七海「う……。貴方せんつして……。ソルトの目でやれやれやしづらのソルトソルトでいつかだら。私は……そんねーんじやなうの？」

仁 「えつ……ええつ……？　えーつ……？」

黒辺 「…………」

七海 「私はただ……貴方に好きだと言つてからえて……嬉しかつた……。……例えそれが冗談だとしても……嬉しかつたのに……。……それも今更『じめん』だなんて……」

黒辺 「……はあ……」

黒辺 「昔話をしどつか」

仁 「……？」

黒辺 「どあるひるに口づき口づかじた。8つのひの歳が離れてしるものが女子に本気で恋をしたおバカさんだ。そいつの才能は悪魔との契約によって手に入れだもので、その代償は寿命だつた」

仁 「はあ……？」

黒辺 「そつ辰ノはなし時間でしておけられるとんじなんてタカが知れてる。……がら、最後は立つ躰を濁すまで感じに消えたかつたんだけじー、……妹販しおやつてね。見ての通り、僕自身が未練がましへりにらぬ」

仁 「なにもそれ……」

黒辺 「どの道ぼくは死んだ。今やり頭や角言つ資格はなしし、極く今は歸つたやつだから、君たちがひつじかんの子を——」

深月 「そんがのダメダメ……」

仁 「……深月……？」

深月 「今やりつして……今だつて七海さんは黒辺さんとのじと離れてるのに……。がれもひんつてやがれいれなくて、だから昔つててんじんが風になつてるのに……。黒辺さんはがんじや眼がなじんでるかー？」

七海 「……」 ※立ち上がる

仁 「ぐ？」

深月 「七海さんが海で溺れるもんになつてるので、きじーーー！」

七海 「ツ」 ※深月にピント

深月 「つ……？」

仁 「かーーー。かーーー。なにしてんのよーーー」

七海 「……真夜さんが……そんななわけがじやなじ……」

深月 「……？」

七海 「……ひ……じめんがわら。……そんに、うるのよね……」

深月 「……え、ええ……」 ※頬に手を当てつつか眞緒

七海 「（ゆづくり深呼吸）……ねえ……真夜さん……。私——、ちつとも貴方のひがわられなくて……だつたら……誰でも良いやつて思つてたんです……。だからつて言ひ寄つてくる男なら誰でも良いやわけでもない。貴方の代わりは知らないから、貴方の代わりに『でもなじ』もつた人がお合ひつて決めてた。……だけど、それじゃダメだつた……」

黒辺 「……」

七海 「……なのに本人はこんな近くにいたなんて、ロクイです。相手わらわ」

黒辺 「（肩で呆れてみせる）」

七海 「——黒辺さん……好きです。大好き……。たぶん、これがからかおじーーー、……貴方のひを愛してらがす……。だから、これからも……『私のひじめか』見ていてください……」

仁 「え……ええつ……。……なに？」

七海 「（クスク笑ひて）たつて悔しきじやなう。やられつけはしき」

仁 「へつ……？」 ※意味がわからなう

七海 「もう、片思ひは疲れたのよ」 ※静かに。出て行つてゐる

深月 「七海さんつ……」

七海 「痛かったねもど。じめんがやらね」 ※優しく頬に手を触れて

深月 「う……うえ……」

七海 「貴方は——……、……私たちになつてはダメも？」

深月 「七海さつ」

七海 「じやあね」

扉を閉めて出て行く

仁 「なによ今……」
深月 「つ……」
黒辺 「言つてくれよねえ……？ 小学生に手を出したら犯罪だつてゆーのに」
仁 「アジやんの口コロ入だつたとは思わなかつた」
黒辺 「半分冗談、半分本氣つて感じかな」
仁 「曖昧なつて私嫌い」※むつす一
黒辺 「双子だつてのにソルガで割り切れてるよ一層のこと清々しさや」
仁 「じつじつソルガ」※むう、眉を寄せせる程度
黒辺 「いや？ 仁ちゃんはかつねうしなあー」
仁 「はあ～……？」
深月 「言わねなくてや……私はつ……」※ソルガの想いは諦めきれるかのではなし
仁 「深月……？」
深月 「ねえ……仁……？ 私が……仁の好きな私が、私じゃなくてやう一人のソルガの方なんだつていつだら……信じる……？」
仁 「えつ……」かちひき持つて……なにも頬ほひ……」※突然なソルガ、黒辺の手前
深月 「真剣な話なの」
仁 「でも、……え……？」※黒辺のソルガにしてくる
黒辺 「僕はしきりく演えてあげるよ」
仁 「あつ……」※一人きりはそれはそれで不安
深月 「……仁」
仁 「急に……なに……？ この前のソルガ私ーー」
深月 「仁つ」※こつち見てー
仁 「……冗談じやないんだよね。本気なんだよね……？」
深月 「うん」
仁 「……はあ～……」私の知つてる深月がこんなタチの悪い冗談言つとお恥えなじし。そもそも嘘つくにしてやわつヒマハナの用意するよねえ……。……わかつた、信じてあげる。深月が実は二重人格だつたつて話？ それとも実は双子でしたとか？」
深月 「最初のが正解。……私は偽物のソルガで、子供の頃、本物の深月が作り出した『女の子としての自分』なの」
仁 「……？ え？」
深月 「深月は本当は男の子で、女の子らしくない自分が嫌で私を生み出した」
仁 「……嘘でしょ……？」
深月 「大アジ」
仁 「……やー……うやうや、やー……？ 無理でしょそれはー……だつて……ヒヒー……？ ……はあ～つ……？」
深月 「私たつてそんがいじめられるのかなつて思つてるんだけじ、でも私は仁にほらして、本当の深月はらつむ私の中にいてーー」
仁 「待つた待つた。ストリマー。……真剣なのはじきーシアソロヘン伝わつてもてるから……。……それで、なに？ 深月が二重人格だつて何が言つたの。……私は……みハコだらうう」※深月くの氣持がわざりしだらううの。
深月 「深月は……演えもつひしてや」※認めたくなじけれど受け出さず
仁 「く……？」
深月 「うおはやつ……私の中にはらかしてつ……僻つてするつむのはがらて……。これがりすもで私も意味わからなじけじ、けじ、私がじてソルガがじなじなんて意味なじからつ……だからつ……、だから……力をかして……」※徐々に感情に寄せて。本当は自分で連れ戻したい
仁 「深月……」
深月 「……私じや……深月を連れかせないからつ……仁が……ソルガにこづはソルガやれつ……だから、お願ひつ……、……お願ひだよ……仁ーーー、……深月を助けて……」
仁 「……わかつたつー」
深月 「……つ……？」※一瞬もくわからなかつた
仁 「なにがなんだかわからんだけじ、けど貴方も私の知つてる深月なんですか？ 傷物つてか、深月の女の子成分があんたつて言つたら貴方も私のよく知つてゐる深月。私の友達ー」※にやつ、頼り甲斐のある
深月 「仁つ……」
仁 「ほれほれー、かわいい顔がたいたいなじたよオ？」
深月 「うんつ……」※涙をぬぐいながら
仁 「だからさ、深月がお願ひつていうなら私はわかつたー。助けたげるーー。それが『親友』つて奴でしょー」

深月「つ……ありがとね……」

仁「おつか」※ただし事情はよく飲み込めてない

「4」

波打ち際に歩み寄る七海

七海「幽霊たなんて……笑つちゃつわね」

波の音

七海「……黒沢さん」

極「なにしてんの」

七海「あら、帰つたんじやないの」

極「ああは言つたけど七海さん隣すまで帰れないも。連れ戻すのが目的だったんだし」

七海「あらあら? ものやく妹さんから私に乗り換えてくれたつていうのかしら?」

極「七海さん」※馬鹿ないふせよつてよね

七海「……あの部屋には、幽霊が住み着いてるの、知つてた?」

極「幽霊ねえ……?」※知らなかつたという壁前

七海「嘘つき」※はぐらかやなうの

極「知つたのはわつまつも」※壁参

七海「……私たつてそんなの信じてるわけじゃないけど、あの子達が嘘をつくとも思えなうし……、なんだか嬉しかつたのよ。これつて変かしら」

極「存外マルくふだとは思つかな」

七海「駄目?」

極「うらやまじやない? けど死後の世界にかけるつてのは馬鹿げてる」

七海「……」

極「それは俺が許さない」

七海「驚いた。ほんとに私に興味を持つてくれたの? あんなに体を重ねても誰かやんのこじぱかり見ていた隣に」

極「嫌いじゃなじから、七海さんのいふ、罰だ。何を言わなりでも察してくれるし、踏み込まれたくないから強がつてゐるじこりとかは可愛らし。ぬらじゆみ抱きながらじやなうと眠れなうむらじか正直そそる」

七海「慰み者には一度いらわね」※自嘲

極「七海さん——、もうやめにしません?」

七海「なにをかしら?」※余裕ぶる

極「諦めるのを」

七海「くえ……?」

極「じつせ諦めよつししたつて諦めらんないのはお互様なんだし、無理なもんは無理」

七海「つ……」※とんと胸元を突く

極「……?」

七海「自分から振つておじて……戻くもそんがこを言つたものね……」

極「だつてお互い、優先順位つてあるじやん? だから——」

七海「私はあの人を忘れやうと思つた事、一度もないわ」

極「じゃあなうで俺は声かけたの」

七海「声をかけたのは極君でしょ?」

極「手を出したのはね。呼び止めたのはそつち」

七海「……」

極「忘れる必要なんてないんじゃないかな」

七海「ふわけなうドーー」

極「……」

七海「……諦めるいふか……おれいふかドキドキ……おつとめの人のいふばかり何処かで追つてしまつ……。桜界の端に、景色の何処かに、あの人がいるんじやないかと思つてしまつてしおりいふがじねほん苦しうかつ! 貴方にはわからぬでしょ?」

極「わかりませんし、わかりたくありません」

七海 「ツ……」
 枢 「あいつがいなくなつたら俺は耐えられなつて眠らねがつ——だから、そんな顔をする七海さんが好きです」
七海 「貴方ってほんと……どうがしてる……」
 枢 「七海さん」
七海 「つー、ううわ。わつ……ううわ……」
 枢 「……」
七海 「あの人いなくなつて……かのことにいるのが分かってるのに触れるといわでせなつたんだ……」 ……こんな事つてありだと思つ……？」
 枢 「黒辺さんに見られてるつて思つのは、前から教わらなじんじやないですか」
七海 「はあ……」
 枢 「それに、黒辺さんと同じになつたつて、そんな風になつた七海さんをあの人人が受け入れてくれるとは思わないんで」
七海 「どうしてそつ思うのかしら……？」
 枢 「だつてあの人、……いまだに七海さんのこと、好きそつだから」
七海 「——、…………そつね……」
 枢 「だから……足りない分は他で補つしかなじんじやないですか」
七海 「それが貴方つてこと？」※悔意、煽るつうに
 枢 「都合のいい関係だとは思つてゐんですか？」※お互い様でしょ
七海 「……——にか以上誰かに恥ずかしきりん見せるのも續……か……？（※あくまでも穢ね除けつ）……重いわよ、私。あの人いなくなつて分かつた以上、わつも。……それでもううの」
 枢 「んなの前からでしょ」※はあ？
七海 「な……」※失れじやなじかしら。
 枢 「それにあの人への仕返しには一度いじんじやない？ 俺には見えなかつたんだけど」
七海 「……ほんと見えればよかつたのに……。……そしたら、悔しがる顔をたんと壊能でせでしきつに」※苦笑
 枢 「今でも十分悔しがつてると思つも。だつて七海さん、綺麗だし」
七海 「ありがと」
 枢 「ん」

黒辺 「あーあー、見えないからつてイヤヤ口ラシがね……」

波の音

黒辺 「……シハア……。仕方ない。仕方ないかなあー……？ これは……。一応年長者だしね。にちやんが行くなら七海もつてつこになるもんねえ……？」

波の音、重ねて

黒辺 「久しぶりに外出と行おもすか？……？ できればお手柔らかに頼ねよ——……？ 『深月くん』……？」

「」ササ 「繕く」

「5」次回予告

七海・枢 「次回予告」

七海 「私たち、これでまだやを合つてつじどうのかしら」

枢 「一応俺はそういう認識だけ」

七海 「そもそも付を合つてたつて言えるの？ 私たち」

枢 「ん？」

七海 「確かに体の関係は持つてたけど、一度も枢くんつて私のことを好きだとか愛してるとつて言つてくれたことないじやない？ 第一、最初からやを合つましきつ、そつしましきつて感じじやなくてウフフ、あ、はあ……？ て感じだつたじやなら？ と言つ事は恋人同士つてうつもりややつぱり」

枢 「時間切れです七海さん。その話はまた今度」

七海 「そりやつて男つていつかはしかかるのやね。瞼昧にして次があるかも分からぬじのに、だから男の人つて」※以下略
 枢 「次回、カラー・ティスト第一話、僕たちこれでクラシックアップ」
 七海 「ほんとその点において黒辺さんは、」
 枢 「あ————」

「6」

七海・枢 「次回予告は終わらね」

枢 「七海さんにてほんと黒辺さん好きですかね」
 七海 「愛してるわの」
 枢 「黒辺さんが生きてた頃って、七海さん幾つだったんですか？」
 七海 「えつ、7歳？」
 枢 「小学2年生……？」
 七海 「愛に年齢は関係ないわ」
 枢 「そうではなくて」
 七海 「8歳の年の差なんて、世間じや珍しらかのやからどうも」
 枢 「高校生が小学生についてのがやせじんです」
 七海 「年の離れた妹だと思えはしないじやない。恋愛対象でしょ？」
 枢 「頭おかしくんですね、知つておした」
 七海 「幼稚園ぐらいの子が実習に来た大学生のが兄さんとかに憧れる時期つてあるじやない」
 枢 「ああ、そつか。黒辺さんのがいけないんだ」
 七海 「あら？ 黒辺さんは舞士始めたわよ？ キスのひとつややかでくれなかつたわ」
 枢 「当然ですね」
 七海 「今思えは唇ぐらし奪つておけばよかつたのかしらね。あの頃は純粋だったわ？」
 枢 「俺を見ていつのやめてからつていいですか」
 七海 「あらほんと、この男に捕まつたものだわ？」
 枢 「ヒドい男でいいですよ、別に」
 七海 「拗ねたのね。面白い」
 枢 「それはよかつたです」
 七海 「じかい、カラー・ティスト、第一話。ファーストキスは生徒会室で」
 枢 「どうでやうじ情報を公開しなじでもらえますか」

〔1〕「水底に響く音色」

「一」

三ツ木 「……はも……」

三ツ木 「ヒロ様……」

三ツ木 「ためんな、肝心なところをお願いつかやめて」

三ツ木 「ええ、私は——、……私はいつもして……再びヒロ殿に仕合ひでまただけで幸せ者でいらっしゃいます」

三ツ木 「……だけれど僕は君のことは……そのヒロ様って人のことは全然……」

三ツ木 「時が過れば何事も泡のものと消えてゆくばかり。……人は記憶ではなく、在り方であると若えます。」

三ツ木様は、確かに、ヒロ殿であった時の記憶は保持ではありますかが——……これがいつして私とお話をしている姿形、そして振る舞いは、紛れもなくヒロ様であられます」※和やか

三ツ木 「作り話ってことかおり傳るわけだけじね」

三ツ木 「信じていただけなくいか、この身を擲げるだけですか」※詫美み

三ツ木 「君は——……、さあ……ひつや僕にはない……（※帰る場所なんてないんだから）」、……何処か違う街にでも行こうか。深月が一人でやつややつとつらつらにならしだ

三ツ木 「ヒロ様がそつお望みであれば」

黒辺 「憧れるねえ？」

三ツ木 「ー？」

三ツ木 「黒辺やーー……」

黒辺 「ハハメメハハ、三ツ木やーー」

三ツ木 「何しに来たんですか……」

黒辺 「あんまりじやなうかな。先輩として君にアドバイスしに来ておけたって言つた」

三ツ木 「ヒロ様……」※ひつやうじましちやう

三ツ木 「深月のことは平氣ですも」※だから歸つてください

黒辺 「違うな。そつじやなう」

三ツ木 「……？」

黒辺 「僕はね、七海の子を贈やしたくなじんだも。女の子はみんな可愛らからね？ 気がついてるんだろ？ なのに目をそらして、知らなうふりをしてる。……君がじなくなつたら、おやんせきひと君の亡靈を追ひ続けるひつやなるよ」

三ツ木 「何言つてるんですか、」

黒辺 「全部深月ちゃんから聞いちやつたみたいだからね？」

三ツ木 「嘘ですね」※絶対に誰にも詫美やうしと言つ確信があつた

黒辺 「ああね。けい、このおお君がじなくなればさきひと彼女は深月ちゃんの中に君を求めてゆくだろ？ それを拒めるほど深水深月つて言う女の子は薄情でやうじ。そつ言つ子なんだろ？ 『おの子は』」※三ツ木がそういう風に創作した

三ツ木 「つ……流石元作家さんですね」※否定でやうじ

黒辺 「流石にやうし人格を生み出せるやうな想像力は僕にはなかつたけじね（詫美）。だけじ、想像はじつは僕らの先をゆく」

三ツ木 「……本当に深月は？」、詫美したんですか……？」

黒辺 「（ふふふ、と笑う）」

三ツ木 「じつしてそんね……」

黒辺 「朱らしくなかつたからだろ」※わかりやつたことを聞くだも。小馬鹿にして

三ツ木 「僕を……？ なんて」※心底わからなうじ

黒辺 「それは僕の口から語るべく詫美じやなうかな」

三ツ木 「……？」

黒辺 「歌うし、向を合つたね、男ならち？」

ノシクの音、じゅぱぱ

「2」

ぶかぶかと船で浮かんでいる深月

極 「仁——……」

仁 「深月は……ほんとうに戻るの……？」※回想

深月 「うん、仁が行って？」

仁 「けど……」

深月 「お願い」

仁 「……わかった。任せて」

深月 「うん——」※回想終わり

深月 「はあ……」

■深月 「ああは言つたけど……大丈夫かな……」

■三上 「これから深月深月は深月だけのものだよ？」※もがいたね・回想

■深月 「何考えてんのよ……私の為……？ それって逆じゃん？……。私が三上の想いに……バカ……」

深月 「はあ～……」

七海 「随分深いため息だこの」

深月 「すみません、船、出して頂いたりして……」

七海 「ううん？ どの道、山ちゃん一人で行かせるなんてできませんから」※からひと極を見る

極 「なんですか」

七海 「別に？」※クスクス

深月 「……」

七海 「本当に自分が行きたかったんじゃなしの？ 一一件事情は言つたくないから聞かなくてねけりやね、……おなた、凄くやじかしそうな顔してるわ？」※意地悪。静かに山ちゃんがけむり

深月 「私は……、……必要とされてなうのよ……」

七海 「くそ？」※嬌るもつに。そつかしゆめ的

深月 「それにもつ、『潜れません』し、行つたつてしきりがなじです」※苦笑、強がり

日向 「その通りなのです」※わははは

「わははん、と乗り込んでくる日向

深月 「日向ちゃん？」

日向 「フウ……、……また嵐が来ます。早くお戻りください」

深月 「やだよ。……それに三上三上三上の所に向かってる」

日向 「待つてねのま。三上三上三上、一人のものにして欲しく思われましたので私は……。……後、先ほどのことを謝つておかねばいけないと思って。まちが深月様が潜れなくなつてしまわれたときは思つてやがりませんでした。私のせいでどうしたら申し訳ありません」※ぐい

深月 「う……ひっくりしだけられ……でも平気。気にしなじで……。日向ちゃんの仕業じやなうんじよ」

日向 「はう……」

七海 「あなた……」※何処かで聞いた声

日向 「む無事で何よりです」※七海に苦笑

深月 「……日向ちゃんは……ひつして三上三上の肩を持つの？」

日向 「ひ、やつしめすい？」

深月 「たつて三上三上、ひつかひつてるんぢよ……。そんなの……ねからうと思ひなじ……？」

日向 「うえ」

深月 「ねんじよ。たつて三上三上三上、本物の深月はあひかほのじよ……」

日向 「……良さではありますか。じちうが本物であります」

深月 「日向ちゃん……」※そんなわけない

日向 「ヒロ様が、そつと離めになつた……。ほりせ取れ入れるのが務めではありますか？」

深月 「——」

ヨウ「はい……」

深月「私、貴方みたいにはなれないみたい」

ヨウ「深月さま……」※まだ迷っている。

深月「枢」※キヨシ

枢「なんか嫌な予感しかしないんだけど」

七海「拒否権と一緒にあつけた？」

枢「ひどいですね……で、なに。仁が取りに行つた『忘れ物』と関係あるの？」

深月「うん。……七海さんの使ってた酸素ボンがつてまだ学校にあるのかな？」

七海「私自ら、ちゃんとメントナノスしたのがあるわ？」

深月「……それ、取ってきてからこでも良じ？」

枢「はあ……？ 今から？」※ここから？ マジですか

深月「うん」

枢「時間、そんな無いと思つただけ」※波が荒れ始めてる

深月「お願い」

七海「お願いでもるわよね？」※魔性

枢「……はあー、分かったよ、取ってくれればいいんだる？ 取ってくれば」

七海「偉いっ」

枢「後が怖いだけですよ」※まじで

ヨウ「つ……」

海に飛び込む枢

枢「けど、俺が戻るまでに仁が帰つてきたら引き返してもらお。今度はやばそつだから」

深月「うん、わかってる」

枢「ならいい」

潜つて消える枢

深月「七海さん」

七海「なにかしら」

深月「例え幽霊たつたとしても……黒刃さんがそこについてくれて……嬉しかつたですか？」

七海「……」

深月「納得……でももしか……？」

七海「……そつういやつて……、後々付いて回るんじゃ無いかしら」

深月「……」

七海「私はーー、……性格悪いから（※苦笑気味）。それでや良心で人に甘えてみるとこにしたね？ 難堪する？」

深月「……え、すぐらなあつて……思らもす。大人だなあつて」

七海「違うのよ（※クスクスクと笑つて）大人がつてるだけ。……誰かを想つ気持ちに大人が子供がなじでしそう？ 分かつたふりつて、謀魔化して、譲れなうんじるで意地張つて……。……寂しきのね、きつむ……。けど、それつて悪いことじやなじや思ひわ？ 海で一人、沈んで行くよりなんかはずつと」

深月「（クスクシ笑つて）」

七海「なに？」※意外だつた

深月「やつぱり、枢のところ、好きなんじやなじですか」

七海「え……？」※呆気にとられる

深月「そーいう顔ですよ、それは」

七海「……（※そつと自分の頬に触れて、クスクシ笑ら）そんがねけがらじやねら」※黒刃の眞緋から一步離み出した

深月「そうですか」※苦笑

波の音

深月「//シサーエ、私ね……、//シサに言つたかったこと、沢山あるの。……だから、」

仁 「だから戻つてやつよー。」

深月 「話やせて、今度はちゃんと」

三浦 「ひ……」

三浦 「ヒロ殿……」

仁 「三浦さん。」

三浦 「僕は……」

深月 「私は、向を合つから。貴方と」

三浦 「僕は、帰らねばよ。」

仁 「ひ……」

深月 「この海の中で、ちゃんと」

三浦 「ちゃんとね」

深月 「貴方と……、向を会いたい」

仁 「続く」

「4」 次回予告

三浦・深月 「次回予告一」

枢 「お前はうらめが三浦」

三浦 「え、いきなり『うらめ』」

枢 「仁可愛らし、深月可愛らし」

三浦 「 枢たつて七海さん美人じやんか」

枢 「七海の女帝たつて通り名あるんだよあの人」

三浦 「ぐ……ぐえ……」

枢 「水中戦でサメを絞め殺したとか噂になつてるし」

三浦 「何それどいつも言つて」

枢 「それに出で行くピンなんて可愛い方だなあつて……」

三浦 「じやうじやうその出べ方はどうなのやー」

枢 「そつしづばお前お深月なんだよな」

三浦 「え」

枢 「可愛いよな、三浦さん」

三浦 「かよ、 枢ー？ 落ち着いてー 枢ー？ も、も、もーつー？」

枢 「次回、カラー「ライスト」、第一話。僕、女にされちゃいました。——冗談たよ冗談。俺が深月に手を出すわけないだろ？」

三浦 「じやうじやう、信用できなひんだよねえ……？」 ※キスしたじやん

「5」 番外編

枢・仁 「番外編、ある日の双子」

仁 「ナ——」

枢 「……」

仁 「ナ——」

枢 「なんだよ」

仁 「……気にくわないんですけれど」
 枢 「だからって足で踏む理由にはなってないな」
仁 「あんた節操なさすぎでしょ。女なら誰でもいいのか」
 枢 「ああ、如月先輩。聞いたんだ？」
仁 「自ずと耳に入ってくるのよ。——あんたに捨てられた話とかね」
 枢 「あつそ」
仁 「なんで女帝？ あの人があんたに声かけるとは思えないんですけど」
 枢 「声かけてきの向こうだよ。つか、俺から声かけるとかありえないだろ」
仁 「つはーっ、モテ男はしきこと違うねえ」
 枢 「やけに突つかかるな。そんな悪い人じやないよ、先輩」
仁 「知ってる。生徒会長だしね。ただ心配になつただけ」
 枢 「なにが」
仁 「あんた、本気で恋したことあんのかなって」
 枢 「……はあ？」
 枢 「真顔やめらー」
 枢 「バカじやねーの」
仁 「どつちがはー。人が心配してあげてるっていつの話」
仁 「人の心配する暇あつたら自分の心配したら。お前こそ彼氏つたりなんやーせよ」
 枢 「うつせらー 私はうらのよー 私はー」
仁 「あつそ」※立ち上がりて部屋を移動する
 枢 「枢!？」
仁 「まあ、軽蔑してくれんならそれはそれでいいかもな」
 枢 「はあ……？」
仁 「仁は俺みたいになんないってひどい？ 良いんじやない？ それで」※部屋を出て行く
仁 「ちよ、ちよつとなにすそれー。意味わかんないんですねーー。」

■ 枢 「意味わかんなくてーよ、別に」

枢 「なんて、往生際がわりーか」

仁 「……何よあひつ。…………ふん」※なんかムカムカする

枢 「続く」

「6」

黒辺「〇〇後××です。オーディオドラマ『カラーティスト』はYouTube、Podcastなどでの配信の他にもおカHJソーシャルメディアなどを封入した有償版の配信も行なつております。第一〇話、第一一〇話のおまけは『次回予告は終わらない』『番外編、ある日の双子』。(通常に一言口メハト追加してくださり)。詳しく述べスタジオ『カラーティスト』公式サイトをご覗くださり」

【1-2】「深き月、水面に沈めば」

「一」

三井サ 「すこし座しててねんね。あん、久しづり。」
仁 「——」※呆然と、息を飲む
三井サ 「どうしたの……？」
仁 「深月……深月だ……」
三井サ 「ああ……うん？ そうだよ？」
仁 「……。」
三井サ 「むかし、小学校2年くらしへかが……？ まだ机かにとせ置かれてくらしへ一緒に遊んでた深月だよ？」
※苦笑
仁 「……」
三井サ 「どうかした……？」
仁 「うつぐ……なんかかくかくしながらけい……私……」※ボロボロ涙が溢れる
三井サ 「……」※罪悪感
仁 「久しづり？ 深月？」
三井サ 「……うん……。驚いた？」
仁 「そりやあやうく……。けい、わかつた。確かに私の知ってる深月はあんたで、あつちの深月が私の知ってる深月なのね。絶対！」
三井サ 「わしかつて歸つてたの？」
仁 「うつぐ……。けい、なんかある日急に『深月ってこんな感じたつけだー……』て思つたのは覚えてる。
元々優しかつたけいが、上手くなつたつていうか、女の子らしくなつたなつて」
三井サ 「ああ」※心痛りある。深月はそついつ女の子として『生まれた』
仁 「私の良く知ってる深月はこっちの深月だつたんだね」
三井サ 「……だけど、本当の深月はあつちなんだ」
仁 「え……？」
三井サ 「戀はや、海神様なんだつてや。神様の生まれ変わり。詳しきはわからぬけい、多分深月って女の子がかくもどじたんなら、割り込んでやつたんじやないかな」
仁 「向ひの深月が本物で、深月は偽物だつて……」
三井サ 「本物とか偽物とか、そついやなくて。別々の存在が一つの身体に入つてたつて感じかわ。だから深月はあつち。僕は神さま」
三井サ 「だから僕は戻らなきや。戻るわけにはいかないんだ。」
仁 「神様だから？ 關係ないもん、帰ろ？ 」
三井サ 「帰らなき」
仁 「なんで？」※信じらねじ、といった感じで笑つてみせる
三井サ 「深月は……深月に任せた方が良し」
仁 「……？」
三井サ 「戀は恋はいんだ」
仁 「深月……」
三井サ 「深月にむろしく頼む」

深月 「カラーティスト 第12話、深き月、水面に沈めば」

扉を閉める

仁 「待つてよ深月！ 深月！」
黒辺 「あーあ、ほっぽり出されちゃつたー」
仁 「黒辺……」
黒辺 「なんだよその顔。空氣読んで外してやつたつて言つた」
仁 「はあ……。ちよつと深月……？ 出ておなさい深月……？」
黒辺 「アクトテイア過ぎだよ」※呆れて

仁 「だからかかふしててか仕方ないじゃん。聞こえてるんだよーーー。」

黒辺 「出て来るわけないんだよなあ……」

仁 「つはー……困った子ねえ……？」

黒辺 「そんな子供みたいな」

仁 「子供じゃねえ」

黒辺 「良く言つよ。辛い現実から逃げたくなるのは大人も一緒だと思つね?」

仁 「逃げたつて何にも解決できなうでしょ?」

黒辺 「たくましきねえ……？」

仁 「それにさ、深月は一人で悩んで、……むつ一人の深月を作つちゃつらぬんで、それで今度はしなくねりて馬鹿だよ。それで別のところに行つたつて絶唱ねんがじつにぬの目に見えてんじゃん」

黒辺 「——仮にも相手は神様だつてのに、良く言つよ」

仁 「神様でも深月なのは変わらうでしょ」

黒辺 「君に彼のなにがわかるんだろうねえ……? 何年も。相談するかしてからえなかつた君に」

仁 「それは——……今が全て」

黒辺 「愛はつよし、か

仁 「はあ?」

黒辺 「僕はなんとかわかるけどなあ……彼の気持かわ。あそで殴られるも、かひくへ」

仁 「それは……、いやだけが……」

黒辺 「彼は自分自身が嫌いなんだよ。それとも自信のなさの裏返しかーーー。……彼が深水深月は自分じゃない方がいいって思つた結果がこれなんだる? なら、キスでやしておけるしかねじやたらかな」

仁 「はあー? 馬鹿なのー?」

黒辺 「馬鹿もなにも大真面目さ。王子様のキスでお姫様は目覚めるって王道だろ? 目を覚ましてやればはらじんだよ。私には貴方が必要なの、貴方はソルトクラウドのやつて涙ながらに訴えれば届く届く。定石だる」

仁 「小説の読みすぎなんじゃねえ……」

黒辺 「失礼だなあつ、これでや撃せ方を工夫すれば涙抜きには翻れねーーー」※大作家ですかー?

仁 「深月——」

黒辺 「……聞こちやうがう……」

仁 「……無理だよ……深月はーー、……深月は私を置いてつゝ街で生活してたんだもん……へー、私のソルトがなくてつ……」

黒辺 「ふううん……、僕はそつは思ねじやうね」※含みを持たせて

仁 「なにもそれ……」※なんとかムカつ

黒辺 「あれられねじやうからうそ、遠くにおとつけてゆく、あるんじゃねじやうかな」

仁 「はあ……?」

黒辺 「不器用だよなえ、みんなや」

۱۱۶۶

「わつー？」※流されそう

「おおつゝ、急につ……ひつやつ……」※幽靈なので

「んんやうつうつー？」※柱を掴んで耐える

「嵐の影響かな。こんな激しい海流——」

「つつせうねねえー？ なんであんた平氣なのーー」

「幽靈だから」

「死ねーーー！ ていうか成仏しろーーー」

「ナニナニハシミを立てる神社」

黒辺 「てかこの建物やっぱくない……？」

仁 「もういつ壊れてもおかしくないって深目言つてたから——」 おまつと深目——
黒辺 「じゃうがないなあ……？」

仁 「はあ？！ 何処行くの？」

黒辺 「僕は幽霊だからね、鍵がかかつてじゃうが壁があるうが関係ない——」

仁 「……？！」

黒辺「少し話して来るよ」

仁「あ、も、ちちひーー、黒辺ーー？ 深月ーーー、かーーー」

「2」

「ハハハハハハーと扉を叩き続けていた」

黒辺「あーかー、大人しく待つてればううのにーー、って、わーつ……贈らう。物理的にも精神的にも。なにしてるの君……」

三ツサ「こんなことなら深月の中に入れた方が良かったかなー……とか」

黒辺「ねらねらねらー？ セツかく手に入れた自由たってのには言つてんだ。どちらか、そもそも深水深月は君の方だろ？」

三ツサ「うえ……僕はわたつ……なんかヒロ様で人の生まれ変わりひしー。この体は元々深月のやうで、僕はそこには、」

黒辺「違うだろ。笑わせやねーだよ。そりやね深月かやんくの罪いやで、彼女への裏切りたと僕は思ひや」

三ツサ「僕は……」

「ハハハハハハーと扉を叩き続ける」

黒辺「時間がなじから單刀直入にいつけどや。お前を好きたって言つてくれる女の子がいて、お前が女の体だらうがなんだらうが氣にしだらつてやたら抱きしめたりやうじやが一かつ。なにかかかかしてんだよ？」

三ツサ「後悔しているんですね」

黒辺「してゆーー、うちの七海は綺麗だけじ、昔の七海はそれこそ食べかやうたじくらじ可愛かったんだー、ひん剥いてぐログロしてやりたか？ たたーー」

三ツサ「うわあ……」※苦笑氣味にシロ引か

黒辺「お前も男ならわかるだるー、にが他の男に抱かれても平氣なのかよーへー」

三ツサ「つ……、……深月が……極きスをした時……」なにも言えなくなりました……」

黒辺「はあ……？ ……ああ……あの子も明後日の方向に足を抜けるからねえ……？」

三ツサ「僕は……黒辺さんのもとにたましきはなれません……」

黒辺「この僕の何処を見てたましきだなんて笑つちやうんですかーー」

三ツサ「傷つくのが怖いんです……だつて僕は……。……『深水深月』には成れない」

黒辺「見事にじらせちやつてまおーーー、いや、好きだけじね？ そつうつす。ひこじんねじれになじれちやつてる子は大好物なんだけじー……、……あの子たちが君を見てなじつてしつらう、そりやねんまひだぜ」

三ツサ「つ……」

黒辺「差し出された愛に怯えてんじやねーやうひ、ラブスピキロバー」

三ツサ「なんですかそれ」※意味わかんないんでかい

黒辺「放送禁止用語に引っかかるだよ、懺れ、至れー」

三ツサ「はあ……？」

「キキキ

黒辺「……へー、ねらねらねらー、本格的にこの神社やばらでしょー？ 君がひーしきが勝手だけじ、じちやんは返してあげなじとふるひじん思ひやーー？」

三ツサ「つ……つるるー……」※しおしお扉の方へ

扉を開ける三ツサ、海流が木太ー

仁「三ツサー」

三ツサ「仁へーー、黒じかひやねーり僕がーーー」

バキッと柱が折れる。扉が開いたことで屋根を内側から持ち上げられていく。

三ツサ「……ーー、危ないーー」

仁 「くつ……」
三ツ矢 「くーーー」
仁 「三ツ矢ーーー」
三ツ矢 「くつ……」 ※間一髪の所で手を摑む、自分は神社の一角に拘まつて

うねり。「ゴホホ、海流に流されそつになる一人。

リジキ「くひそ……流れれつ……」

仁「ララセハリジキ、泳ぐの得意だから私は——」

リジキ「こんなうなりの中巻を込まれたら怪我するって——」

仁「つ……？——なによこれつ……」

黒辺「うず躰つてが……ハコケーンかなあつ……？」※死んでよがつた

仁「なんであんたは平気な顔してんのよがー？」

黒辺「幽靈だから」※2度目

仁「だあつー？ もうつーー」

リジキ「仁つ……抱まつて——」

仁「みづきよシ……」

リジキ「手を……離さないで……」のまま若の陰につ——……」

仁「——」※ハシゴする

リジキ「くわくわうつ……ーー」

「——覚えてる……、……覚えてる……」の感覚……」私——……」

「そうだ……私は……、私は『シキの山』のほう所に——」

ごぼごぼ、流れてくる流木

流されていく(シキ)

「私は……彼の、そういうところが……好きだったんだ」

『3』

海面、波が高い

深月「つ……？」
七海「どうかした？」
深月「いま名前を呼ばれたよ」
——、

雷

七海 「……また荒れてきた……」

深月 「……七海さん、溺れる原因が精神的なものだつて言われたら信じますか？」

七海 「気の持たぬつて蝶が飛ぐるもつになるつて言われたつて信じはしないでしょ？」

深月 「ですもね」

七海 「……？ ……— なにあれ？……」

■深月 「ひす瀬——？ でもこんな——」

ヨウ 「ヒロ様……？ 還つ……これは——」

深月 「田中ちゃん……？ 田中ちゃん—— どうかしたの？」

ヨウ 「……ひ……海が……海が長らく自分たちを放つておいたヒロ様に怒つて——」

深月 「はあー？」 ※海つて馬鹿なの？

ヨウ 「ヒロ様——」

■深月 「あの中に……深月が……？」

深月 「……ひ」 ※口をつゝ睡を飲む

七海 「深月さん—— なにしてるの？ あなたは——」

深月 「でか私……私はつ……」 ※前のめりに

七海 「やめてつ…… わたしが使つては極くんも戻つてくると思つかぬ」

■深月 「でか’……今行かねがや—— // ジサが……// ジサが遙く行かねがする——」

七海 「深月さん……？」

深月 「大丈夫……大丈夫 大丈夫——……」 ※自分に言ひ聞かせたり

七海 「馬鹿な真似はねじて——」

海面

■深月 「溺れる感覚は今でもはっきり感じ取れる。息苦しくて、目の前が真っ暗になつて——、……すいへ、怖がつた。……けどり……」

深月 「……深月を失つのは、わざと嫌だつ——」

飛び込む

七海 「深月さん——」

ゴホホ

深月 「ひ……ひ……シ……」

■深月 「わづらの震はでまかう——、遙く指し——……海の中は真っ暗で……全然先も見えないはい——、……けど、」

■深月 「——深月ひ……」

■深月 「深月を感じ——」

■深月 「じゃ行くからひ——」

■深月「深月を……感じや……」

■深月「深月は……私が……」

流されておだ//シキを受け止める深月

深月「深月……」

//シキ「なつ……?……」

「ホホホ

深月「つ……」

//シキ「深月——?——」

■深月「タメの……」 わか わか——、流されて……息が……、はじめは、……の身体は、繋が——……」

■深月「深月の……」

■深月「離したや……タメたの——……」

「ホホ。潮流が止まる、底に沈む

深月「つね……」 ※はじめの一瞬は物語り

//シキ「つ……なつ……ひつて……」

深月「——」 ※意識を失いかけてくる

//シキ「深月……」

■深月「ああ——、そりに、深月がしゆ……ソリに、深月が……。……ひつかつても鑑越しにしか会えなかつた深月が——」

■深月「わからんて言わからで。わからか、まだ私を……つづく、求められなくてからい、ただ、私は、貴方を——」

//シキ「わからか、息が……?」

深月「つ…… (※苦笑してみせる)」

■深月「私はなにわからか。……ただ、貴方がそりにしてくれる、それだけで私は……」

深月「つかつら」 ※か細く、終り出して

//シキ「つ……」

深月「つ——?」 ※キスされて。口移しでの酸素供給 (理論不明)

■深月「みつ……わ——?」 ※朦朧とした意識で

■深月「そのわ、私は//シキを感じた。//シキの熱を、//シキの震いを、……肌で、感じていた」

■深月「//シキ——?——みつかつ……」

//シキ「つ……」

■深月「私は——それが嬉しいだなんて……許されるんだつづく——。ソの瞬間が、永遠に続けばいいだなんて、思つてもいいんだどうか」

///シキ 「……しつかりして、深月」
深月 「私……好きだよ……？ 深月の匂い……大好き……」
///シキ 「喋るなつ……しお海面に——」
深月 「大好きだよ……//シキ……——」
///シキ 「深月……？ —— 深月…… もう…… 深月……」

■深月 「だから、ひとつかひとつだけ、できれば、おひかわひかく……計られるからいの声を聞いていたい」

■深月 「深月のそばで、彼の存在を……感じたら……彼と一緒に……生きて……いたら……」

///シキ 「深月……」

■深月 「願いは虚しく、海の闇の中くと消える」

■深月 「私は——、私の意識はそのまゝ暗闇の中くと沈んでしまった。月の光など、微塵も差し込みはしない。深海の、水底くと——」

「4」次回予告

枢・七海 「次回予告か～」
 枢 「どうしたんですか」
 七海 「なつ、何がかしかー」
 枢 「しゃらや動搖しますわしてしま」
 七海 「なんでもねらわむ？ ただ単純にクロハクアシブンか言はながりむかはおノケノケと残つてらるがるわね、なんて思つただけよ。……何よ、その目」
 枢 「いえ、微笑ましいなつて」※につたり
 七海 「バカにしないで頂戴ー？ これでも平気よー。平掌心はんたかー」
 枢 「だから何がですか」
 七海 「乙女心がわかつてないわよ、枢くん」※口口口表情が変わる
 枢 「分からなうから聞いてるんじやないですか」
 七海 「だまらつしゃらー」※照れが一周回つて頭痛のタネに
 枢 「七海さんがそう言つならそつしますけい」
 七海 「はあ……どうして私が……」
 枢 「はあ？」
 七海 「煩いー。次回ー。カラーリトイズム、最終話、目に見えなじむの。……これからは遠慮しなから覚悟なやうー」
 枢 「可愛いなあ」※小動物みたいで

「5」次回予告パート2

枢・///シキ 「次回予告のそのあとー」

枢 「つひに……なに怒つてんだあの人」
 ///シキ 「枢つ……かーなーぬー」
 枢 「///シキ。……なにしてんの」
 ///シキ 「しゃあ……？ あんまにむいたやいたやしむれてて入るに入れなかつたつていつか、トイネー」
 枢 「なにが」
 ///シキ 「思つんだけじゃあ、七海さんについて正反対じゃん？」
 枢 「ああ……つん？」
 ///シキ 「何処に惹かれたの」
 枢 「ん？」
 ///シキ 「だから七海さんの何処が良かったの」
 枢 「……胸が大きいやう」
 ///シキ 「わー……」※素直だー

極 「良い匂うする」
三ツサ 「ああ、確かにー」
極 「何気に手料理スケミツモジ」
三ツサ 「それはボトム高じねー」
極 「でしょ。仁にはやつらの全然ないから」
三ツサ 「あー……」
極 「でも仁なんだろ?」
三ツサ 「ぐ~」
極 「お前。仁はなんだろ?」
三ツサ 「あ、あ、あはー……? めー、つん? つん? もあ、つん……?」
極 「何処からうの」
三ツサ 「べ、しゃあ? ……? それはその……」
極 「つるべただしカサシたし、無は無かすけど、何処からうの」
三ツサ 「……か……可愛い……ひー……」
極 「は~」
三ツサ 「可愛いからうじやん、全般的にー、仁可愛いーー」
極 「……ああ、仁は可愛い」
三ツサ 「つーー、仁可愛いー、可愛いねーー?」
極 「……素直じゃねーな、仁じつ」

「6」次回予告のそのあとで、その2

仁・七海「次回予告のそのあとで、その2」

仁 「-----」
七海 「あら、なにしてるのかしい。溜み聞きたなんて泥棒猫にお似合いね」
仁 「じつかがー、てつつか大さう声出せばドーー」
七海 「はあ? ……ああ……、……仁可愛い」※ほそつ
仁 「ひやつー?」
七海 「(クスクス)」
仁 「七海ちゃん?」
七海 「いいじゃない。好かれてるなら喜びがちだよ。あなたも罪な人ね」
仁 「だつて全然褒められてる気がしませんねー。確かに私は七海ちゃんみたらにほりかくないスタイルが良くなじ、料理も……ヒ……得意ではありますんけど……。けど努力はしてるやんーー」
七海 「努力?」
仁 「エクササイズとかパシクとか……かやんじや料理本見てるし本の口は結構ちゃんと教えてやりつたり……」
七海 「……可愛い」
仁 「なにがよー?」
七海 「思わず鼻血が」
仁 「ふあ……?」
七海 「確かにあなたはかくもくりんでして、仁は娘だけだわ」
仁 「言ひませんよ、今時」
七海 「そういう貴方が素敵だって思って貰えるのが、私らしくねから? 楽だ」
仁 「樂つてーー」
七海 「なにも。良らうには奴隸に使てる男が一人。良らう身分ね」
仁 「私はそんねー、……私はだだ……三ツサキが喜んでくれればうれしくて……だからね……」
七海 「うわあ……」※げんなり
仁 「なんですかその顔ー」
七海 「そういうのは求めてない。りもそこそこ」
仁 「はーーー。かか、かかひし侍かわらじーー、七海ーーー」
極 「仁」※すぐそばにいた
仁 「極ー?」
三ツサ

仁 「///シヰ……？」

///シヰ 「あー……あはは……」

仁 「こ……こ……… 壱海さんのバカ…………」

///シヰ 「あー……行つちやつた……」

極 「……やつは可愛いよな、仁つて」

///シヰ 「極も大概だよねえ……？」

極 「ん？」※何食わぬ顔で

【一三】「血は貰へたらかう」

「一」

「子供の頃から大人しくて、手のかからぬ良き子だつて、言われて育つた

「小学校に上がる頃までは深水神社もまだ健在で、たまにその手伝いもして」

「シキ「良し子でいらっしゃい」言われたことに従つて。反対する「いやがく」、良し子を演じて。だからだろうか、小学校に上がる頃には男子に多く揶揄われたり、虐められるようになつて」

「オノボロ神社だとか、今日は巫女服じゃねーのか。他愛のない、今にして思えば氣にするほどでわからぬだつたんだろつけどー、彼らはきっと僕が抱いてる違和感を敏感に感じ取つていたのかわしねえ。」

「僕は、鏡に映る自分を見てはこの子は、誰なんだろって、ずっと思っていたから」

波の音、教室

「2」

深月「…………は…………」

仁 「ねえ、深月はかつ好きな人とかできた？」

深月「〈……?〉※中身は△△△

仁 「すーむーなひーどー」 极めが必ずやんに好きで言われたうしくてやあ

深月「ああ……」

「傑用也。」卷之二十一「子雲賦」

深月「業は……」

洪月 但以

「…………貴の…………深司…………？…………私の生までも前の…………？」

深弓「…なぜなの？　誰がいるの？」

深層「ふ」

二月心月

仁 なにわお

「嘘」など分かりやすし+

仁 嘘じやが

深月「あはは」

波の音

深月「——、そつか……確か、この後……」

深月「（一人で泣いてる）」

从 1980 年代开始，中国开始大规模地引进西方的管理思想和方法。

卷之三

卷之三

「深戸……」「サキ……」※別れを告げるようにな

深月・三ツ矢「カラー・ティースト 第13話 目に見えなくとも」

「2」

波の音、船の上

「三」

回想・水中

田中 「ヒロ様……」

三上 「田中ちゃん……。深月がつ……深月が……」

田中 「……へ……残念ですが、もつ……」

三上 「……元に、戻せないかな」

田中 「ヒロ様……？」

三上 「深月は元々僕の中にならんだ。だからまだ……」

田中 「ダメです」

三上 「田中ちゃん」

田中 「ね、一人を分かつ事とは語が通じます……。深月ちゃんはわい……つまり、人のお力を助けるのがいいから、ヒロちゃんの命を……それにヒロの母で過ごした時間であればヒロちゃんより深月さまの方が長い、おかしくするも……」

三上 「田中ちゃん」

田中 「嫌です……」

三上 「……」

田中 「……嫌弃しちゃたし……嫌いだからって結構です……。私は……私はそれでもヒロ様と共にありたくなりました……」

三上 「ひーーー」 ※そつと腕を伸ばす

田中 「ひー……」 ※吐られるかどびくつ

三上 「……ありがひー……」

田中 「ヒロ様……」

三上 「……嬉しい」

黒辺 「……」
仁 「もう……やだ……、ひつしていいが——……。……私はただ……深月と友達でいたら……それだけでもかつかたのに……なんでも……」※ぐるぐる
た 「らしくねーな、お前」
極 「つー? 极……ー?」
仁 「やつと見つけた……奥の方まで潜りますもんだけ」
極 「帰つても」
仁 「帰れねーよ、お前置いてなんて」
極 「兄貴がラジナで、双子なんだから」
仁 「双子だからじやねーって、アブねエから迎えに来た。それだけだろ」
極 「つ……」※言い返したところで譲つてくれないだろ?と察してくる
仁 「大体何があつたにしき遊行すなんて、じしたの。らしくねーじやん」
極 「わつ、私たつて独りになりたい時ぐらじあるのー、人をなんだか思つてねのやー」
仁 「馬鹿一直線的な」
極 「はあつー?」
仁 「昔からうだうだ考えるより先に身体動くタイプだろ? ……ああ、だからこんなことがってんのか」
極 「馬鹿にしてんの……?」
仁 「ふふやへ」※馬鹿にしてる
極 「はあああー?」※ムシキーー
仁 「いいから帰んぞ。深月も待つてる」
極 「……やだ」
仁 「我が儘言つなつて」
極 「やだつーー……私……、……深月にもつ会わせる顔ない……」
仁 「……なら、家に帰るか」※即決。それがうらな、つん。
極 「え……?」
仁 「とりあえず家まで送るも、んで学校くはそのあと行く。ひーや風が吹きもねづかぬれなしだら」
極 「まあ、いいだろ」
仁 「ちよ、わちつひ待つても……そんなの後回しにするだけ……」
仁 「なんの解決にもなんなかうど」会うたくなじんだる? なら、俺はそつむかはらじ思つかけど
仁 「あんたつてほんと……」※辛うじてからばすべく逃げる
仁 「なに」
仁 「……じうわよ、私の負け。こーやん。……深月たちのいじ、行く」
仁 「ん……。だよな」※分かつて言つた
仁 「……けい……やつは怖い……」※珍しく弱音
仁 「大丈夫。お前は俺より勇氣あるよ。馬鹿なだけかわしねらけど」
仁 「なにそれ、頼ましてるつもり?」
仁 「そう聞くとえんがうつうたんじね」
仁 「……」
仁 「……んだよ」
仁 「別に」
仁 「……なにがなんだか俺はもうわかんねーんだけどや。……お前のそつうつー直線なハルハ……俺は好きだから。迷わず、突つ込んで見ればうらじやねーの」
仁 「一一極……」
仁 「……なんだよ」
仁 「つ……なんでもかうじつ……」※先に行く
仁 「はあ?」※迷ひかける
仁 「あのやーー……一度しか言わねじからかやんと聞こいもがやうやへ」
仁 「なに」※あー?
仁 「……ありがどね、……お兄かやん」
仁 「……ん。……ああ……」※それはそれで思つたより悪くなかった
仁 「……うつ……」

ごほほ

ガタガタと震える恋

深月「……極く……大丈夫でしょうか……」

七海「さあ」

深月「さあつて……」

七海「だつてあそひでひと待つてたつて私達まで流れかわつてだらりつし……。これだけ遅いつていいは極くんも流石にバテてゐるじやならへ」

深月「心配じや……ならんですか……？」

七海「心配じや。けど、極くんはおの人じやならぬ。……大丈夫」※恋の外を見ている

深月「……そつ……ですね。……おもへひと水の距離取つておます」

ガララ。廊下に深月

深月「……はーつ……」

恋カラスに映る自分を見て。

仁、去り際の回憶

深月「……！」……顔じ顔してたが……。……そつだもね、『シキ』やつぱり、『僕』は……」

廊下を歩く

ポタポタと水滴

深月「——……！」……？」

仁「深月……」

極「……はーつ……俺部屋行つてるかんな……？」※ウタクタ

仁「うん……」

極「……」※すれ違ひやまに深月をちらり

仁「あ……あのさ、深月？、私ね？」

深月「……むつひー、心配したんだもー、！」……※男の深月

仁「ぐ……？」

深月「心配したんだもー、！」

仁「『シキ』……？」

深月「……つん？、なに？」

仁「『シキ』なの？」

深月「……まあね」

仁「——……」※息を飲む

深月「驚かせちゃつてじめんね？、目が覚めたのは『僕』の方だつたんだ。……けどあつちの深月じゃなく『僕』が目が覚めた時、動搖した……。それで何でつて、じつして深月じやなく僕がつて思つて……。……消えるバズだつた僕が残つて、深月がいなくなるなんておかしくて。……だつたら僕が深月として生おもつて思つたんだ。深月は元々僕が作り出したものだから。きっと出来るはずだつて」

仁「深月……」

深月「たはは、！」……顔じ顔見て目が覚めた（※くわいひ缺けて）。……深月はやつらはだもね、……僕が深月として生おもしかなじだもね？、しまおどは目を逸らしておだけいがやんじゆをゆがねやうけなじんだ。深月と……、……仁とも。向おも合わなあやうけなじんだね？」

仁「……そつか……」※苦い、深月が演技をつらぬけいせんの脚本で見抜いてる

深月「僕、深月の代わりに續一杯生おもよ。深月に恥ずかしくだらうつに、ちやんと。……じめんね、仁。僕が不甲斐ないはつかりに」

仁「それで……どうの……？」

深月「ぐ……？」

仁 「深月はわかつてない。わかつてならぬ。深月の匂いがする。やつ一人の深月の匂いがする。」

深月 「仁……」

仁 「深月たつて……。深月たつて……悲しきはするのに。そんなの。私。嬉しいはしない。」

※気を遣わせてくることを理解して

深月 「ほくには……仁か……だから。」 ※少しだけ動搖

仁 「でいいんだよ。」 ※ぐるん。

深月 「つ……？」

仁 「行くところへ。そんな深月には行くところへ。」

深月 「つたあ……」

仁 「自分が覚めた？」

深月 「つ……？」

仁 「自分が覚めた？」 深月へ。

深月 「仁……？」

仁 「深月は川の水になれない。川の水たつてそう。深月は深月で。やはり運の水。」

深月 「——」

仁 「私が妹おはなつたのはやつ一人の深月。アハタセ。私の親友の深月。わかるおはなし。」

深月 「仁……」

仁 「……あんたがでらねんがへだつ。涙……あん。涙……悲しきよ。」

深月 「仁……」

仁 「深月せひかに迷行たわけじやなら。あんたを守らひにした。その振持か。なかつだつひにつかむ。」

深月 「たけじじ業せひ。業は深月を守るために。」

仁 「だからあんたか。深月を守らひにしたんじしも。あんたがそひつむへしむしむには。わかるやしち。深月……？」 深月は、そつうのがたつて、もう知つてゐるやつむ……。」

深月 「仁……」「か……ああ……。」 ※「あああへ……」悲嘆に近づいた声・嘆哭。繰り付けて

仁 「よしよし」 ※慰めて

深月 「私……私……。(声を泣く)」

仁 「……うらやましい。深月は悪くなら。バカ深月が勝手にしたじだわん。あんたは……。」

深月 「じめくたつ。じめくたつ。」 ※自分のせいで深月は泣いた

仁 「じめくたつ。じめくたつ。うらやましい。深月……。」

深月 「深月は、やつうが。ほのかに甘いがふすの感じがす。そつに深月がじたつむの鑑賞たつたむに思えるやつだ。たけじ。私ねー。」

深月 「深月は……。」 ※泣きながら

深月 「深月のことを、求めてしまつ。」

深月 「あああへ……」 ※泣き聲

仁 「……深月……」 ※慰める

黒辺 「あー。」 ほん。ほん。ほん。ほん。あー。感觸の入り込みの匂いがする。しかばんです。ガーッ。幽靈の業には全てお見通しがねえ。船の上でやつてやまのふらでしゃーへか。」

仁 「へつ……黒辺……。あんたがもつてた怨氣もんで……。」

黒辺 「……深月ちゃん、じるね。」

深月 「へ……？」

黒辺 「今までは、つにつつて感じただけじ。今は、一人で、つつて感じ。裏と表みたいだ。わかるかな。」

深月 「深月が……中に……？」

黒辺 「君の、心の中に。つてね。」

仁 「深月が……？」

黒辺 「よかつたね。深月をゆん？」

深月 「つ……。」

「7」

七海 「……なんだかよくわかる気がしないになつてらるよつだけじ……聞こえてつた? 极く少
 极 「すみません、割と眠くて全然……つか思ひです」

七海 「使えないわねえ……全くやう、何が何だかつ……それに今黒辺つて——、ひへー?」

极 「つ……? ジリカシもした……?」

七海 「い、しま……誰かに頭を——、……、……?」

黒辺 「苦笑」

七海 「……またか……そんなん……」

极 「……? 七海さん?」

七海 「……(苦笑つて) なんでもないわね——。行かまつもん?」

「はい」※眠い

深月たちに近づく七海

「 θ 」

七海・枢「13 5話 深月と仁が部室から出て言った後の二人」

ガララ

七海 「お帰りなさい……よく頑張つたわね」

七海 「はあー……なんかもう一回見えてますよ……」 なんなら天使とか見えて……

七海 「あらあら、私がそう見えるのかしら」

七海 「意地の悪い天使もいたわんですね……」

七海 「……お疲れ様」 ※汗を拭いてやる

七海 「ん……」 ※甘んじて受けける

七海 「……私はあの子にはなれそうもないわ」 ※少し罪悪感

七海 「七海さん……？」

七海 「まぶしさなつて……思つちやつたわ? あんなに真つ直ぐには私なれないと」

七海 「……ううんですよ、それで。七海さんは七海さんなんだ」

七海 「……ううの?」 ※意外だった。極にむかって今は絶対だと思ってる

七海 「……お互い、それはそれでいいや……ううんじやないですかね」

七海 「……何だか随分穏やかに失恋したみたいね。……少し、拗ねてもうしかじら」

七海 「えーぞ」

七海 「わー」

七海 「ふはは、……似合いませんね」

七海 「そりやうーか」 ※ぶーっ

七海 「……つ……ほんと……似合わないですよ」

「我がながら」※最後までは自分はいくの想いを示さないするかのだと窺っていたが、NTTは置いて行くように放つて。

【一四】 ハピローグ

波の音

深月「んうーん……、シはー……。風が気持ち良くな……」

■深月「風のせつた後の海はとても静かで、……南から運ばれてきた風はとても心地よかつた。船着場で費音れ、夕日を眺めるには丁度いい。一晩中家を空けていたハビの伝説教から解放されたのはつらやつきたつた」

深月「……ん……」※静かに深呼吸

■深月「夢を、……見た。……夢を見たよ! が氣がする。……懐かしい」深月と一人で海に潜った。……そんな過去、私にはないのだけれど

深月「……だけれど、嘘じやねじよだ。……やめ」

ヨウ「——深月さん」

深月「……ヨウさん。……なんですか、その……、……どうもんねへ」

ヨウ「良いのです……何を……氣はつかなくて……良いのです……。『ハビサ』は『これまで』……良らのです……」

■深月「……回つか……この子か。口様を失つてからかわへ——その人の事だけを想つて——……」

ヨウ「深月さん……」

深月「『ハビサ』は消えたわけじゃなにも思つんだ。多分……ここにいる」

ヨウ「しかし……」

深月「うそふたご。……わかるの」

ヨウ「…………」

深月「……ハビサは……あるじから。……何れもあり繪画つてないから表に出してもくれないけれど……、……私にはわかる。あの子はここにいる。……誰がなくなりやつたけれどね?」※苦笑

ヨウ「そうですか」

深月「だからやつ。ハビサが戻れる場所だけはちゃんと守つておひつし思つんだ」

ヨウ「……目を、眞ますとも限りません。それに黒羽さんがあつしやつたもつに『表と裏』。仮に口様がお目覚めになつたとしても深月様は——」

深月「(苦笑) 一一、好きだから」

ヨウ「深月さん……」

深月「誰の意思でわかない。これは私の我が儘。私がハビサを好きだから。だから、私は、ハビサを守り続けたら。——深水深月として」

■深月「彼の側ですへん。一一例え、目には見えなくとも……私には、『わかるから』」

■深月「彼のは、」※彼の(存在・魂・心)は、

■深月「ここに、らねん」

深月「だから、待つてゐよ。ハビサ——」

■深月「貴方が、目を覚ますのを」

「ホホ」と気泡が浮か上がる

■深月「いいじ、待ってる」

■深月「大丈夫だよね、おひる。——たつていいじゃ、これまで肺は体が動かなかったやつだから。だからおひる——、いつか」※ふんわりとした雰囲気く切り替えて

「バシターン」と海面から顔を出す音を入れるかは悩み中

「カラーティスト 終わり」

「——」

クリシット

深月「オーティオムーラ『カラーティスト』 脇齋・森依春・アンドバード・井上やす・ピアノ・真鍋ひかる、トライスト・タム。キヤヌ（みく） 各演者が『〇〇恋××』でトハボを回してください」 韻律せきじゆふ・カラーティストでも迷りました

「——」

深月「〇〇恋××です。最終話までお聴きいただけた方ありがとうございます。オーティオムーラ『カラーティスト』は YouTube、Podcastなどの配信の中には井上やす・井上タム・森依春・アンドバードなどを挿入した複数版の配信を行なっております。最終話を含む第一2話、第一3話、そしてエピローグの総括は『次回予告パート2』『——5話 深月と——が部屋から出でた後の11人』、そして作中で使用された真鍋ひかるの『楽曲』です。（週刊は——言口メハム週加してみやう）。誰しあせスタジオ『カラーティスト』がまたおひ聽くわら」

演者陣、何か口メハムせぬかえたじ方からひしゃれば——言ひつけ。

最後は深月で締めてください。